

資料

井上哲次郎日記 一八八四—九〇

『懷中雜記』第一冊

福井純子

ここに紹介するのは、東京都立中央図書館井上文庫所蔵の『懷中雜記』全二冊のうち、第一冊である。この『懷中雜記』第一冊は、井上哲次郎が一八八四年二月一五日、留学出発のため横浜に向う記事から始まり、留学後期の一八八九年二月三一日までの日記である。本資料の解説は次回、第二冊の紹介とあわせて行う。なお翻刻に際しての凡例は以下の通りである。

凡例

- 1 原文では略字、俗字、正字等が多く用いられているが、常用漢字に直した。
- 2 合字、変体仮名はカタカナに改めた。
- 3 読点、カギカッコ、傍点、傍線は原文の通りである。挿入は。で示した。加点がある場合にはその部分を*で示した。
- 4 原文に抹消がある場合には、左傍に、を付け、右傍に書き改められた文字を記した。抹消された文字が判読できない場合にはその字数を推定して■で埋めた。
- 5 史料の本文以外の部分は「」をつけて区別し、()で傍注を

加えた。また誤字、脱字についても右傍に()を付した。

「^{五世}懷中雜記 第一冊」

「^{五世}丙戌十月ノ末夢中ニ得タル句

壯図千傑出。

哲学万雄興。

日記

○甲申明治十七年二月十五日午後第五時東京ヲ発シ、横浜ニ抵ル、詩アリ云ク、遅々惜_レ別出_ニ都門_一、蓮嶽摩_レ天落日昏、自_レ此所_レ期唯一事、西洋哲学欲_レ窮_ニ源_一。○十六日朝八時仏国船Menzalenニシテ発ス、○二十一日清国香港ニ着シ、二十六日仏国船Sesalienニ駕シテ香港ヲ発ス、○二十九日柴棍ニ着シ、夜船出ツ、○三月三日新嘉坡ニ着シ、夜出發ス、○九日印度ノコロンボ港ニ着シ、同日出發ス、○十六日朝、アラビヤノ亜丁ニ着シ、午後四時

ニ出發ス、○二十二日スエズ港ニ着シ、翌朝出發ス、○二十二日
 ボールトサイド港ニ着シ、夜出發ス、○二十六日意大利ノナーブ
 ルス港ニ着シ、夜出發ス、○二十八日仏國マルセル港ニ抵リ、
 「グランドホテル」ニ宿ス、○三十日午後二時マルセル港ヲ出發
 シテ翌朝十二時ニ仏國パリス府ニ着シ、「ホテル、ド、リポリ」ニ
 投ズ、

第一年期

○四月朝二日朝七時パリス府ヲ出發シテ三日ノ朝六時ニ獨逸國伯林
 府ニ到着シ、初メ「モーレン、スツラセ」ノ「マグデブルグ」旅
 店ニ居リ、八日ノ朝「ドロテンスツラセ」ノ九十五番地ドエレン
 氏ニ移住ス、○四十九日ヨリ「フローベンスツラセ」(Proben Str.)
 ノWilhelm Gros (Bibliothekar des K. Reichs Instizants) 氏ニ就テ
 哲学并ニ語学ヲ兼修ス、報酬、毎七
十五マルク 氏ハツレンテンベルヒノ徒弟
 ニシテ我邦ノ北島道龍氏ガ師トセラレシ人ナリ、ト云フ、

○五月

○六月Prof. Lasselヲ訪ヒ、屢、耶蘇教ノ旨意ヲ論難ス、感服スル所
 ナシ、○此日頗ル苦学ス、詩アリ、云ク、学業従来期ニ大成^原、飄
 蓬万里客心驚、不知壮志何時遂、酸風苦雨伯林城、亦実情ナリ、
 ○七月三十一日ウイエルヘルム、グロス氏ト相別ル○Gerhard Schulze
 ト相会シ興ヲ尽シテ相別ル、

○八月三日夜七時汽車ニ駕シテ去リ翌朝十時頃Heidelbergニ達シ
 Prof. Müller氏ニ寓ス、○一詩アリ、云ク、万里來投澗畔村樹陰深

処俗塵虛^虛、作、征鴻鳴斷千山雨、一穗青燈讀古書、○Kromer
 ト云ヘル人ヲ雇ヒ一週間ニ二回獨逸文ヲ学ブ、毎週二時間毎時二
 マーク、

○九月

○十月二十二日始メテProfessor Kuno Fischer氏ヲ訪ヒ我レ日本ニ
 アル時既ニ君ノ芳声ヲ聞ケリト云ヒシニ歡喜何堪ント答ヘタリ翌
 日始メ氏ノ講義ヲ聴ク○二十五日始メテハイデルベルヒ大学ニ入
 リProf. Kuno Fischer并ニKarl Kies両氏ノ講義ヲ聞クコトニ定
 ム○二十七日始メテKarl Kies氏ヲ訪フ○翌日ヨリ氏ノ講義ヲ聴
 ク、

○十一月Prof. Müllerニ就キ独乙文学ヲ学修ス、

○十二月Prof. Schulzeノ講義ヲモ聴クコトニ定ム、○二十日頃ヨリ
 休業、

○乙酉明治十八年一月二日朝、夢ニ書ヲ攤テ運ヲ見ル、云ク、射^的的
 命中、多^レ獲、奇勝有^レ喜、文字鮮明ナリシヲ以テ起キテ之ヲ書ス、
 奇異ノ感アリ、○五日ヨリ開校、

○二月二十八日Kromer氏ヲ解雇ス、

○三月始メテDunbertト云ヘル人ヲ雇ヒ、一週二時間、法蘭語ヲ学
 ブ、○此月ノ末春雨濛々トシテ処々花ノ開クヲ見、七絶一首ヲ賦
 ス、云ク、「幾日濛々雨似^レ麻、頑雲陰匝接^ニ遙沙^一、独山到处春光
 遍、秘辭吹^レ香異樹花^一、到处一作仏水、
秘辭一作処々、

第二年期

○四月三日、留学延期ノ願書ヲ文部卿ニ送ル、○七日浜尾氏ニ書状ヲ送ル、○二十三日開校Kuno Fischer, Bunsen, Quincke, Gegenbaur四氏ノ講義ヲ聴クコトニ定ム、○一夜長句ヲ賦ス、飄蓬遊万里云々ノ句アリ、○此月菊池大麓来ル、

○五月

○六月初旬和田氏来リ、病ニ嬰リ、日本ニ還ラントス、即チ七古一篇ヲ賦シテ之ヲ送ル、其文ニ云ク「昨夜得_レ君書」云々、○此ノ頃屢々Kuno Fischerヲ訪ヒ哲学上ノコトヲ論難ス、感服スル所少シ、○十七日肥後字野作弥氏来訪即日維納府ニ赴ク、

○七月Bunsen, Kopp, Bekker三氏ノ講義を傍聴し後又Rosenbusch氏ノ講義を傍聴す、

○八月七日第二学期卒る、○一日Blum, Blüntschi, Zöepfel, Schlosser諸氏ノ墓に詣ず、炎暑殊に甚しかりキ、Häusser, Thibaut, Voss, Mittermaier, Friedreich等の墓も詣ずることを得たり、○二十五日Dumberck氏を解雇し更にMüller氏に就き毎週一回仏国文学を修む、

○九月二十九日ミラー氏ニ学ブコトヲ止ム、此月四日留学期限満ホ
一々年限延期被差許○三十日午後二時二十二分ハイデルベルヒヲ出發シ、三五時三十五分フランクフルトニ抵リ、Hôtel de l'Unionニ投ジ、市街ヲ散歩シ、Goetheノ誕生タマジタル家ヲ訪フ、珍奇ノ物極メテ多シ、一々詳翫スルニ違アラズ、就中尤モ希図アリシハゴエテ氏が自ら画キタル「フハウス」中の「ワールブルギスナフト」の図、氏ノ詩の草稿并ニ古琴ナリ、此家ニ住スル老媪来リテ一々指説シ、試ニ古琴彈ズ、其音

玲瓏、尋常ナラザルモノアリキ、壁上ニ桂冠アリ、櫛ノ実、「ケンネン」名木「フヒヒテン」名木等を以テ作レリ、是レ氏ガ死シタルトキニ氏ノ頭ニノセタルモノト云フ、余之ヲ觀ルトキ、櫛ノ実ニ箇墜チントス、即チ番人ニ請ヒ、之ヲ袖ニシテ歸ル、詩アリ、之ヲ証ス、

今尚古箏存_レ二張_一。錚_々試撫_レ覺_レ三淒涼_一。曲既歇余音遠。嫋々長_レ於馬飲_レ長_一。馬引水

壁上緑冠希代珍。西洋風俗。以桂櫛松栴之葉製作綠冠。贈諸詩人。壁上保冠。即是。果々看々果墜又何因。詳是疑詞伯伝ニ衣鉢。我是東洋一学人。

此夜「オペル」ヲ觀ル稍々佳ナリ、其曲深ク賞スルニ足ラズ、

○十月一日朝八時三十五分出發、午後五時五十五分萊布空府ニ到着、bei Frau Vogel, Liebig Str. 5ニ下宿ス、四日檻村清徳、榊某、坂田某萩原某來訪、榊村榊二氏直ニ伯林ニ赴ク、八日Wilhelm Meierck (Stud. theol.)氏ヲ雇ヒ一週二時間宛羅甸ヤコヲ学ブコトヲ始ム、○九日R. Risack (Prof. de langues modernes)ヲ雇ヒ、一週二時間宛法蘭西フランスヲ学ブコトヲ始ム、何レモ二時間○十六日、Leuckart, Hankel二氏ヲ訪フ、○十七日、Wundt氏ヲ訪フ、明治十八
年冬学期○十八日、ライプチヒ大学ニ入りWundt, Hankel, Leuckart, Windsch四氏ノ講義ヲ聴クコトニ定ム、即チ哲学、動物学、物理学、及ビ梵語ノ四科ナリ、○此月Gabelentz氏ト屢々往来ス一日短古一篇ヲ贈ル、云ク、

唐突我嘗訪_レ君居。君即延_レ我他事擲。説来東西語言事。鑿々

中^レ線何達識。驚^ル君通^ル鳥路字。經史千卷存^ル記憶。漢文經緯其所^レ著。博採旁引見^ル学力。我雖^レ久誦^ル和漢書。也聞^ル君論^ニ有所^レ得。他日欲^シ再訪^ル君居。不^レ知忻然君倒^レ屣。

○十一月七日始メテSchwab氏ニ就テ毎週一度伊太里語ヲ学ブ、

○十二月、十日サラサテ氏ノ音楽を聴ク、此月ノ末仏語教師還逃ス○十二日「アリ

オン」会ノ芝居を観る、何れも上出来なり、二十日頃休業○三十一日(夜Mannsfeld(Ober amtsrichter)に招燕せらる、

○丙戌明治十九年一月二日夜夢ニクローノ、フヒツセル氏と哲学上ノ議論を為し、頗る彼をして困まらしめたり、醒めて奇異の感あり、○木場貞長氏婦朝せんとなす、因て七絶一首を贈る、云く、

雲鎖^ニ東瀛^ニ何慘酸。英吞^レ仏噬^レ事多端。期君他日婦朝後。一片赤心^ニ國安^ニ。

十三日ハレ府ニ遊ビ、哲學家エルドマン氏ヲ訪ヒ、哲学上ノ事ヲ談話スルコト一時間、氏種々東洋哲学ノコトヲ訊問セシカバ孔老二氏ノ学、荀孟二氏ノ学、同ジク孔氏二本ツクト雖モ其説全ク相反ス、然レトモ。孔氏ノ主意ニ戻ラザル所以、并ニ四書五経ノ名目指^ル趣等ヲ言ヒ、次テ印度哲学ニ及ビ、ウパニシヤドヨリ起レル所ノニヤ、グイセシカ サンキヤ ヨガ ミマンサ ヴェグンタノコトヲ語り、頗ル共ニ爽快ノ論談ヲ成セリ、暮ニ氏ノ講義ヲ聴テ帰ル、氏ハフヒツセル氏ノ師事セシ人ナリト云フ、○十七日Prof. Richthofenヲ訪ヒ約一時間論談シテ帰ル、○二十九日歐洲第一ト称スルJennist Murzinskiノ唱歌ヲ聴ク、太夕愉快ナリキ、

○三十一日、Prof. G. Fechner氏ヲ訪フ、氏著述時二案ニ凭リテ何か著述セラル、態ナリシガ、余ヲ見テ忽チ筆ヲ投ジ、余ニ問フテ云ク、今ヤ日本ノ開化ニ赴ク、極メテ迅速ナレバ其レ必ズ独立ヲ持スルヲ得ンカ、然レトモ開化ハ高価ナリ、国库或ハ乏ヲ告ゲザルカ、民心ハ種々ナリ、辺陲或ハ不平ノ徒ナキカ、ト又云ク、日本ハ已ニ立憲政体ナルニ非ズヤト、余、云フ、否未シ、然レトモ僅ニ四年ヲ経バ立憲政体トナルベシト、答ヘタレバ氏又立憲政体ハ日本政府ニ便宜ナラザルベシト云ハレタリ、(西洋碩儒ノ言ユヘ学術以外ノコトヲモ。併セテ記ス)次テ談話学問上ノ事ニ転ジタルニ、氏余ニ問ヒテ君何人ノ学派ニカ属セラル、ニヤト云ハレケレバ、生答ヘテ生ハ何人ノ学派ニモ属スルモノニ非ズ、嚮ニ東京大学ニ在ル六年主トシテ哲学ヲ修メ、卒業後概ネ四年間東洋哲学史ノ著ニ従事シ、其業未ダ成ラズシテ当地ニ来リ淹留約二年専ラ西洋哲学ニ従事シ、将ニ自ラ椅立スル所アランヲ欲スル意ヲ述ベタアリラバ併セテ西洋哲学史ヲ著ハス亦甚ク妙ナラズヤ云々ト、余言ヲ改メテ余深ク君ノ講義ヲ聴クヲ得ザルヲ恨ムト云ヒタルニ、氏答ヘテ余已ニ八十五歳労働ニ堪ヘズ、且ツ当所ノ大学ニハ哲学者充分ノアリ、殊ニ余ガPsychophysikノ如キウインド氏アリテ之ヲ講究ス、何ゾ復タ老耄余ノヲ要セント言ハレタリ、其虚心如レ此、余深ク氏ノ人ヲ遇スル慙懃ナルニ服セリ、一日ヨリ更ニ仏語教師ヲ召シテ毎週一回仏語ヲ練習ス、

○二月四日エナ府ニ遊ブ、エナ府ハ萊布望府ヨリ大抵三時間ニシテ達スベキ所ナルヲ以テ朝四時ニ藩ヲ出テ五時二十五分汽車ニ駕シ

テ出發シ、午後八時四十五分ニエナ府ニ達ス、雪正ニ霏々トシテ地ニ堆キコト約一尺、歩々靴ヲ没シ、行路艱難。遂ニ有名ナル哲學家リーブマン氏ヲ其書室ニ訪フ。（大ニモト）。氏余ノ來ルヲ見テ、手ヲ執リテ問フテ云ク、君独乙ニ來遊シテヨリ既ニ幾年ナリヤト、余答テ既ニ二年ハイデルベルヒ府ニアリテフヒツセル氏ニ學ブニ学期、今ハライブチヒニテヴント氏ニ學ブヨシヲ云ヒシニ、氏云ク、君亦フヒツセル氏ニ學ベルカ、余亦嘗テフヒツセル氏ニ學ベリト、始メテ君ノ學フヒツセル氏ニ似タルモノアル所以ヲ曉レリ（次ギニ）。ヘツケル氏又其談話ノ間テ、リーブマン氏ハフヒツセル學派ノ人ナリト云ヘリ種々談話ノ末余久シク東洋哲學史ヲ著ハスノ志アリ、未ダ成ラズ、他年必ズ稿ヲ脱スベシト云ヒシニ、氏云ク之アル哉印度哲學ノ如キハ、不充分ナガラ、オルデンベルヒマキスミラー諸氏ノ著アレトモ支那日本ノ哲學ニ至リテハ、著述極メテ少ク、殊ニ日本哲學ノ如キハ、絶テ之ヲ知ルモノナシ、君若シ東洋一般ノ哲學史ヲ著ハサバ、其功固ヨリ大ナルベシ云々ト、別ニ臨テ又云ク、余君ト相知ルヲ得ルハ生ノ余ノ深く喜ブ所、唯々相別ル、斯ノ如ク速ナルヲ恨ム、若シ再會ノ期アラバ緩々哲學上ノコトヲ論談センコトヲ望ム云々ト、其待遇ノ厚キ余ノ深く感セシ所ナリ、此ヨリ去リテヘツケル氏（五十二歲）ノ講義ヲ聴ク、聴者僅ニ二十七人、大抵二十人ニ過ギルコトナキ由、之ヲロイカート氏ガ二百余人ノ聴者ヲ有スルニ比スレバ、實ニ微々タリト謂フベシ、講義畢リテ共ニ手ヲ執リテ談話ス、氏問テ云ク、君動物學ヲ

學ブカト、余答テ生哲學ヲ修ム、故ニ而格物ノ學ヲ併セシ、以テ格物哲學ノ材料トナサントス、（因テ格物哲學ニ對シテ）生物ノ學ノ如キ嚮ニゲーゲンバウル氏ニ學ビ、今又、ロイカート氏ニ學ブト云ヒシニ、氏又云ク、然ルカ、ゲーゲンバウル氏ハシネライデンライチヒ諸氏ト同ジク余ノ親交ナリ、ロイカート氏ハ頗ル都合ヨキ地位ヲ得タルモノナリ云々ト、（此ノ終ノ一言少シク意味アリ、前言ト承接セザルガ如クニシテ承接ス、我レ既ニ竊ニ其意ヲ洞察セリ）、余又氏ニ君等ノ著書ニ由リテ今ハ我日本ニモ化醇ノ說漸ク流行スル意ヲ述ベタルニ、氏又歐洲ニテモ往日ハ化醇說ヲ信スルモノノ五ナリシガ今ハ啻ニ動物學者ノミナラズ、凡ソ格物究理ニ從事スルモノハ皆之ヲ信ゼリト云ヒシカバ、余之ニ応ジテ然レトモ猶ホ或ハ之ニ反スル者アルニ非ズヤフハフ氏ノ如キ即チ是ナリト云ヒシニ、（此ノ言亦意味アリ）氏身ヲ動カシテ嗚呼彼老タリ彼タリト云ヘリ、余又氏ニ問テ当地ニ哲學家ハーテンスティン氏アリコトハ久シク聞キ及ベルガ今如何セルヤト問ヒシニ氏又答ヘテ嗚呼彼老タリ彼老タリト答タリ、（此言亦同之）此ヨリ余氏ノ案内ニテ動物解剖室ヲ視テ去リ、路ヲ転ジテ哲學家ハーテンスティン氏ヲ訪フ、氏陋巷々尽キル所ニ住ム、余漸クニシテ其居ヲ尋出シ、氏ニ邂逅スルコトヲ得タリ、氏既ニ七十八歲ヘツケル氏ガ彼レ老タリト云ヒシハ尤ナリ、ハーテンスティン氏ハヘルバート氏ノ學ヲ奉ジ、著述モ随分多キ人ナレバ面白キ談話多カルベシト思ヒシニ格別裨益モナカリキ、氏唯云ク、余若キ時ヘルバート氏ニ就キシハ就シガ講義ハ多ク聴カズシテ唯獨學ノ

ミヲセリ、然シ此事ハ他人ニ勸ムベキコトニ非ズ、唯余ハ然カセ
 シト云フノミ、若シ余ガ多ク講義ヲ聴キシコトナラバ便宜ノコト
 モ多カリシナラン云々、其他ノ談話ハ大抵雜談ノミ、余乃チ村叟
 ト談ズルガ如キ思ヲナセリ、「大学校并ニ大学文庫ヲ見テ夜十二時
頃ライプチヒ府ニ歸ル、○八日、文部大臣森有礼氏。願書ヲ送ル、
○十五日 Lieschen (十六歳) Getchen (十七歳) 二女ヲ携ヘクローイデ
ント云ヘル小村ニ遊ビ、夜十時ニ還ル、○十七日 Prof. Wundt ヲ訪
ヒ、種々談話ス、余氏ニ東洋哲学史ヲ著ハスノ志アルコトヲ述ブ、
氏云ク、西洋ニモ稍々東洋ノコトヲ極ムルモノアルトモ皆充分哲
学者ニアラズ、哲学者ハ亦西洋哲学ニ力ヲ尽シ東洋哲学ニ及ブノ
暇ナシ元ヨリ君。若シ之ヲ著ハサバ大ナル利益ヲ生ズベシ云々
ト、○二十三日 浜尾君ヲ伯林ニ訪ヒ、東西學問ノ景況等ヲ論談シ
テ翌日歸ル、○此日チエラー氏ヲ訪ヒ、伯林大學哲學教授ノ模様
ヲ問フ○此月ノ中旬金子堅太郎氏ニ書狀ヲ送ル、○二十七日、哲
學家ドロツピシ氏ヲ訪ヒ、學術上ノコトヲ論談シテ歸ル、○同日
午後三時ウント氏ノ「セミナー」ニ至リ、実験心理學ノ機器等ヲ
見テ歸ル、甚ダ益スル所アリタリ、○二十八日、「ベーターース、
キルヘ」ニ於テ音樂ヲ聴ク、頗ル佳、
 ○三月二日、スツルインペル氏ノ講義ヲ聴ク、氏交々類例ヲ挙ゲダ
 ーウイン氏化淳論中考想多キコトヲ論ズ、○伯林ヨリ裴珪爾堡に
 ニ至ルマデノ旅費ヲ領収ス、○三日九十二麻六布受取ル、○五日
 ハインチエ氏ノ講義ヲ聴ク、○六日閉校、○十日夜婦人ニ「ダー
 ミラー」氏と共に演劇を見る、此月屢々演劇を見たれども、此夜の

技を以て第一となす、外題ハワグネル氏の「ローヘングリッ」な
 り、○十三日朝比奈氏ニ書狀ヲ贈ル、○十五日父并ニ妻ニ書狀ヲ
 送ル、○十九日ウント氏ヲ訪ヒ、學問上ノ事ヲ談ジテ歸ル、○
 十九日萊布窠府ノ新芝居(ノイエステアトル)ヲノ粧置置ヲ觀ル、
 大ニ益スル所アリキ、役者ノ數二百余人、高キモノハ一年二三万
 若クハ四万麻克ヲ得ルヨシ、役者ハ或ハ四年或ハ五年或ハ猶ホ長
 ク居滯留スルコトアレトモ大抵皆歴遊スルモノナリ、音樂ヲ奏ス
 ルモノ二十七八其目給料役者ヨリ貴キナリ、芝居ノ舞台并ニ内幕
 粧室ハ汚穢ナレトモ粧置ノ廣大ナルハ驚クベシ、粧飾ハ皆「ライ
 ネワンド」に画ギタル者ノミ、其數少ナクモ數百種殊ニ入用ノモ
 ノハ百若クハ百五十位ナルベシ、平生芝居口内ニ画室アリ、其所
 ニ画工、山水家屋ヲ画ク、見物人ハ二千百人ヲ容ル、ニ足ルト云
 フ、粧室ニ衣服銃砲鎧兜ノ類數千種アリ、皆男子役者ニ貸受スル
 モノニテ女子ハ借用スルヲ得ズ、女子ノ衣服類ハ他人ニ適セズ男
 子ノ衣服ハ他人ニ適スル故ナリト云フ、舞台ヲ「ペロイヒテン」
 スルハ皆色アル「ガス」ニ過ギス、越列幾ニアラズ、越列幾ヲ用
 フルコト甚ダ稀ナルヨシ、○同日ノ夜「フライシエツ」ノ名ヲ觀
 ル、粧飾ノ美実ニ賞スベキ者アリ、○二十日裴珪爾堡府ヨリ萊布
 窠府ニ至ルマデノ旅費獨貨六十六麻五十布領収、○二十一日「ゲ
 ワントハウス」ニ於テAnton Rubinsteinノ洋箏ヲ彈ズルヲ聴ク、
 音調ノ美、變化ノ妙、驚絶歎絶、此技ニ於テ三昧ヲ極ムル者ト謂
 フベシ、○二十三日、萊布窠府ノ「アルイレ」坊ニ於テRichard
 Wagnerノ家ヲ訪フ、其誕生室ヲ見シノミ、其他一物ノ觀ルベキナ

シ、家ハ陋醜極マル、数日内ニ此家ヲ毀ハシ新築ヲ囃ハルト云フ、

為ニ街頭人群集シテ之ヲ觀ル、蓋シ再ビ觀ルヲ得ザルガ為メナリ、又之ヲ急ニ写真シテ売ルモノアリ、該家ノ前面ニ姓名月日ヲ記シ、其上ニ桂冠ヲ掛ケタリ○此後ハワトタリ○二十四日、ゴーリスニ於テシラー氏ノ家ヲ訪フ、矮小陋隘、二三室アルニ過ギズ、氏ノ用ヒシ机アリ、底ノ書キシ状アリ、其他見ルベキモノ少シ、余氏ノ誕生日ニ一説ノス掛ケニル桂冠ノ花三箇ト氏ノ書状ヲ得テ還ル、氏ノ室中元正三属セザル也、氏詩集ノ異版ヲ集メタルハ甚ダ善シ、今萊布望府ニシラー会アリ、此家該会ニ属スト云フ、此家ノ一室ニゴエテシラーヘルデルレツシング

等ノ肖像ヲ置ケリ、家ノ建築賞スルニ足ラズト雖モ、其内ニ入り、氏ヲ追慕スルノ念勃然トシテ發生セリ、○二十五日、有名ナル詩人ゴツトシヤル氏ヲ訪フ、氏云ク、余會テ一般即チ万国文学史ヲ編セント欲シ、各国ノ訳書等ヲ通覽シ、頗ル草稿ヲ成シタレトモ、未タ完全ナラズ、亦全篇ノ連絡モナキユエ中絶ノ態トナレリ、他日再ビ繼續スルヤモ計リ難シ云云、氏又云ク、君若シ支那日本ノ詩ヲ訳シ、詩人ポーデンシユテツト氏ノ如キ人ニ乞ヒ、独乙ノ詩風ニ正サシメバ或ハ何雅趣アルモノヲ生ゼシカ、然レトモ余未ダ支那日本ノ詩ヲ読マザレバ、判スルヲ得ザルナリ云云其他記スベキコト鮮シ、○此日写真セシム、二七七日シラーヲ解雇ス○二十八日朝比奈ニ書状ヲ送ル、○二十九日、吉岡拝山深沢伊三郎并ニ川端伯兄ニ書状ヲ送ル、○三十日外山ニ書状ヲ送ル、○三十日外山并ニ朝比奈ニ書状ヲ送ル、此日写真ヲ得タリ、此日ナリス、ニール之ニ氏ヲ解雇ス

第三年期

○四月一日甘木春山吉田捨象元田隆三氏ニ書状ヲ送ル、○三日、午前八時二十九分出發、同日十二時三十分伯林ニ到着、直ニEngelbrecht, 36 III Dorothean Strasseニ宿ス、此日公使館ヲ訪ヒ、又浜尾氏ヲ訪フ、○十日エドワード、フオン、ハートマン氏ヲ訪フ、伯林ニ有名ナル哲學家ハートマン氏アルコトハ久シク聞キ及ベルヲ以テ今回親シク其人ヲ訪ヒ、哲学上ノ説ヲ聞カマボシト思惟シ、チエラー及ビ其他ノ人ニ氏ノ住所ヲ問ヒシニ、皆知ラズト答ヘラレタリ、然ルニ余ノ會テ独乙語ヲ學ビシグロス氏ト云ヘル人ハツレンデレンブルヒ氏ニ學ビ多少哲学ニ通ズルジ、兼テハートマン氏ノ知己ナリト談話セシコトアルヲ以テ、氏ニ此事ヲ問ヒシニ、氏答テ云ク、成程ハートマン氏ハ余ノ知己ナリ、氏ハ伯林ノ郭外田野ノ間ニ住シ、家ヲ繞テ皆牆ナリ、牆ノ外ニ標アリ、標上ニDas Abaden des Schutt & Müllist bei Strafe Verboten, Dr. Edu. V. Hartmannトアリ、是レ氏ノ住スル所ハ伯林ノ塵捨所ニテ誰シモ氏ノ家ノ側ニ塵ヲ捨テニ行クユヘ斯ク標ヲ設ケ塵ヲ捨ツルコトヲ禁ゼリ、去レド氏ノ家ハ案内ナシニハ探索シ得ルコト極メテ難カルベシト、余翌日地圖ヲ案シ、大抵方角ヲ定メ、伯林ノ郭外塵捨所ニ於テハートマン氏ノ家ヲ不見シテ、荒野ヲ横ギリテ行ク数里、始メテ一ノ破屋ヲ得タリ、其周囲ニ塵埃蕪破碗ノレタルモノ、破鐘破鑊山ヲ成セリ、因テ以為ク、是レ必ズ氏ノ家ナラント、内ニ入りテ訪フニ、一眼ノ老嫗腰曲リテ蝦ノ如キモノ如虎々々出デテ來リテハートマント云ヘル人ハ此ニ住セズト言フ、因テ再ビ進デ田

野ノ間ヲ行キ、遂ニ彼ノグロス氏ノ談話セシ通リノ標ヲ見出セリ、標ノ傍ニ唯一箇ノ家アルノミ、家ヲ繞リテ皆■牆ナリ、牆内ニ草枝多ク、風瑟瑟トシテ之ヲ吹キ極メテ寂莫ナリ、毫モ人声ヲ聽カズ、牆ニ三門アリ、皆鎖シテ開カズ、從テ内ニ入ルノ路ナシク、余甚ク惑ヘリ、時ニ浮雲日ヲ掠メテ野色蕭条タリ、余門外草上ニ小立シ彼蒼ニ向ヒ、吾我ニ問フテ云ク、如何ニ厭世觀(Pessimistic Weltanschauung)ヲ有スレバトテ斯ク世間ヲ離レ、他人ノ來訪ヲモ許サ、ルハ預想ノ外ニテ、苟モ猶ホ生死大海(Samsara)中ニ有情物タルナラバ此十万里外ヨリ來レル我ヲ隔絶スル謂ハレナシト、乃チ再ビ開門ヲ開カントス、会々童子婦リ來リテ此内ニ入ラントス、因テ氏ノ在否ヲ問フニ、童子答ヘテハートマント云ヘル人ハ此ニ住セズ、又住セシコトナシ、或ハ此ヲ去ル數百歩ナルウイルマルズドルフト云ヘル一小村ニ住セルヤモ計リ難トシト云ヒカバ、去リテ該村ニ至リ、野ヲ伯林ニ指リ百方氏ヲ探索セシカド、氏ト同姓名ノモノモナカリキ、翌日即チ十日細ニ伯林住人姓名録ヲ檢スルニハートマント稱スルモノ大約百五十名アリ、就中哲學家ハートマント同ジクエドワードナル実名ヲ有スルモノ五六名アリ、乃チ直ニ此三名ヲ訪フ、皆哲學者ニアラズシテ或ハ兵士或商賈ナルニ過ギズ、今一名アレトモ是レハ姓名録ニDr. Phil. & Leutnantトアリ、哲學家ガ「ロイテナント」ナリトハ思ハレズ、又語學博士ノ稱号ヲ有スルノ理由ナケレバ哲學家ハートマン氏ニアラザルベシト思ヒ、訪ヒ殘シタリキ、然ルニ此夜氏ノ著ヲ見ルニDr. Phil. & Leutnantトアリ、又氏ハ會テ軍人タリシコトアレバ、「ロイテナン

ト」ノ稱号アルモ■コトワリナリト思ヒ、翌日即チ十日之ヲ訪ヒシニ、既ニ移転シテ在ラズ、其内ノ人ニ問合セタルニ現今此ノ移転先ハ略分リタリ、伯林ヨリ數里ル一小村ナルコト因テ又此ニアリシハートマン氏ハ哲學家ナリシカト問ヒシニ、哲學家ナリシカ、不確ナル人ナ醫者ナリシカ何ナリシカ分ラヌトノ反答ユヘ、又遠キ移転先ニ尋行クモ如何ト思ヒ、甚ク困却セリシ殆ド氏ト相逢フノ望ヲ失ヒシカド、又以為ク、氏ノ著述ハ皆ドユンケルト稱スル書肆ノ出版ニ係ル、此書肆ニシテ氏ヲ知ラザルノ謂ハレナシト、因テ往テドユンケル氏ヲ訪ヒ、二階三階ヲ經テ書肆ノ姓名ヲ見ズ、四階五階ノ一隅暗里ノ処ニ於テ遂ニ書肆ノ住所ヲ發見シ、ハートマン氏ノ住所ヲ訪フ、然ルニ二年二八バカリノ花ノ如キ小女出テ來リ、氏ノ住所ヲ告ゲテ云ク、氏ハ今伯林ニ住セズ、伯林ヲ去ル數里ナルLichterfelde, (Wilhelmsplate 9)ト云ヘル一小村ニ住セリト其言「ポーチエル」ノ言ト暗号ス、乃チ直ニ汽車ニ乘リテ該村ニ至ル、幾株ノ枯柳、林ヲ成シテ全村ヲ掩ヒ雨蕭々風莫々。到处人影ヲ見ズ、然レトモ大約一時。斗シテ遂ニ氏ノ住所ヲ柳条深处ニ得タリ、余大惑ヒ乃チ名刺ヲ投ジ、氏ト談話スル一時間余氏云ク、チエラー エルドマン フヒツセル三氏ハ皆哲學家ニシテ何レモ方今哲學家ノ領袖タリ、ウント氏ノ如キハ心理家ト謂フベク、哲學家ト謂フベカラズ、(此言フヒツセル氏ガ會テスペンセル氏ハ哲學家ニアラズト言ヒタルニ似タリ)フエヒネル氏ハ特殊ノコトニ於テ多少効アリト雖モ一般哲學ニ於テ左程取ルベキモノモナク、余ト相デューリング氏ハ盲目ニシテ今専ハラ書生ノ試験ヲナス時ニ用ユル論文ノ助ヲナシテ生活シ、哲學上ニ効ア

ル人ニアラズ、ラツソン氏ハ博覧多識ニシテ見ル所高く、取ルベキモノ多シト雖モ、唯其頑固ナルヲ奈セン、テイルタイ氏ハ一モ取ルベキモノナク、ミセレット氏ハ會テ進歩ヲ為サル而已ナラズ今ハ既ニ老耄論ズルニ足ルナシ、云々ト、氏ノ言或ハ過当ノ所アリト雖モ、頗ル肯綮ヲ得タルモノアリト謂フベシ、氏又海外ノ哲学ヲ論ジ、仏国リギー氏de la France et de l'étrangerト称スル哲学雜誌ヲ贊美セリハ尤モ善シト云ヘリ、(ウント氏又會テ深ク此雜誌ヲ贊美セリ)氏又云ク、英國ニテハ曩ニコントヲ奉ズル者多カリシガ今ハヘーゲルヲ奉ズルモノ増加セリト、余答テ云ク、君ノ言フ所ハ米國ニアラズヤ、米國ニハハリス、モリス、ハウイソン諸氏アリテヘーゲルノ学ヲ主張スレトモ英國ニテハストリング氏ノ外ヘーゲルを奉ズルモノヲ聞カズ、ケーアド氏ノ如キハカントヘーゲルニ出入シ、未ダ全クヘーゲル学派ヲト称ス可カラザル歟ト、氏又乃チ云ク、ラツソン氏英ニ近來ヘーゲル派出デタルコトヲ云ヘリト、甚タ怪ムベキ論ナリキ、氏又云ク、世人世余ヲ以テシヨツペンハウエル氏ニ出ツルモノトスルハ誤ニテ余ノ説ハ東西ノ哲学ヲ折衷シイハユル *idealistisch-realistische Ansicht* ニ過ギザレトモ又之ガ為メ頗ル耶蘇家ノ批難ヲ受クル事トハナレリト、其他種々愉快ナル論談多カリキ、別ニ臨デ氏再會ノ期アランコトヲ望ミ、且ツ云ク、他日君ノ業ヲ成スヲ觀ント、余心竊ニ海外一知己ヲ得タルヲ喜ベリ、氏ハ黒瞳漆髮ニシテ美鬚髯多ク、丰姿欽スベキ人ナリ、唯々其跛

者タルヲ惜ム而已而已。○此月ノ初メ Paul Jonas ヲ羅匈語教師トシテ雇フ、Gerardy ヲ仏語教師トシテ雇ヒ、羅匈二時間仏語一時間宛学ブコトニ定ム、○十六日伯林大学ニ入校ス。Zeller, Heinholtz, Weber, Du boi Reynond, M. Virchow 五氏ノ講義ヲ聴クコトニ定ム四月二十
八日開校

○五月一日シヨツト オルデンベルヒ グルーベ ウエーベル四氏ヲ訪フ、此夜浜尾大森三宅諸氏トレッツシグ氏「ナタン」ヲ独乙ドイ劇場ニ觀ル○四日夜ハルトマン氏ニ招燕セラル、大ニ愉快ノ論ヲナス、○二十一日、シヨツト氏ニ招燕セラル、ドイツセン グルーベ諸氏亦席ニアリキ、○二十七日、夜グルルーベ氏ニ招燕セラル、千賀氏亦來ル、十一時ニ帰ル、此日烈風雷雨、○此月ノ初浜尾氏ト王宮文庫ニ入り、書籍ヲ觀ル、○此月ノ初ヨリ希臘ヲ学ブコトヲ始ム、

○六月、初旬ノ頃、浜尾氏ト共ニ有名ナル文学史家ウイヘルム、ジェシル氏ヲ訪フヒ、日本ニ羅馬字アルコトヲ述ブ、氏驚テ云ク、抑々又何等ノ拳ゾヤ、未開ノ國ニ於テハ斯ル例ナキニアラザレトモ、日本ノ如ク發達シタル國ニ於テ此ノ如キコトヲナサンコト預想ノ外ナリ、独乙ニテモ始メ「ルーアン」ト云ヘル文字ヲ用ヒシカド、之ヲ廢シテ羅馬字ヲ配ヒシコトアレトモ當時独乙ハ未開ナリキ、瑞典、丁麻、諾威、ホエメン諸國古來ノ文字(独乙字?)ヲ廢シテ羅馬字ヲ用ヒタレトモ日本ニテ漢字ヲ廢シテ羅馬字ヲ用フルガ如キ大變革ニアラズ、英國ニ文字改良会アレトモ、亦同日ノ

論ニアラズ、之ヲ論ス要スルニ日本文字改良ノコトハ人ノ未ダ経験セザルコトナレバ、唯用心ヲ要スト云ツノミ、云々、○其後一日浜尾氏ト共ニ哲學家チルタイ氏ヲ訪フ、平凡論ズルニ足ラズ、○十八日浜尾氏トコフ氏ノ病虫実験室ヲ視、次デ人類博覽会ニ至リ、備ニ列品ヲ実檢シ、偶々バスタアン氏ニ會フ、帰途哲學家パウレン氏ヲ訪ヒ、數時談笑シテ去ル、○十九日、三宅氏ニ招燕セラレ、「オテルアンペリアル」ニ至ル、○二十日、浜尾氏ニ招燕セラレフリードリヒ、ハーゲンニ至ル、○二十四日、三宅氏英國ニ向赴キ、浜尾氏撒克遊ニ赴ク、

○七月二十五日、ハルトマン氏ニ招燕セラレ、氏ノ義兄并ニ美術史家ラヴェンスブルグ氏亦來會ス、大ニ興ヲ尽シテ歸ル、○二十九日、有感即賦「七絶二首」、

自、出、郷、関、已、幾、年、半、生、感、慨、旅、窓、前、從、今、養、得、展此積年、獲、此、積、年、到、底、欲、凌、西、域、天、

前途不獲、緬、想、半、生、前、志、要、從、今、百、鍊、堅、稔、々、喬、松、風、易、觸、唯、因、強、幹、耐、秋、天、

三十日チエラー氏講義ヲ畢ル、三十一日ヘルムホルツ氏亦講義ヲ畢ル、ウイルホウ デュボアレーモン二氏亦大抵同時ニ講義ヲ畢ル、

○八月二日哲學ギズチキ一氏ニ逢ヒ、哲學上ノ事ヲ論ズ、此人盛ニ日本進歩ノ状アルヲ歎賞シ、又日本固有ノ性質ヲ失ハザランコトヲ論ズ、○同大学ノ課業皆畢ル、○十八日再びギズチキ一ヲ訪ヒ、哲學上ノ事ヲ論ズ、○此頃又ドイツセン氏ヲ訪ヒ、哲學ヲ論ズ、

氏ハ印度哲學ニ心酔スル者ナリ、○金井延來ル、

○九月二日、文部大臣ニ届書并ニ仏國留學ノ事ニ付テノ願書ヲ送ル、

○六日ギズチキ一氏ヲ訪ヒ、大ニ哲學上ノ事ヲ論難ス、服スル所ナシ、○十日父并ニ妻ニ留學延期ノ事ヲ詳報ス、○十三日朝比奈氏ニ書狀二通并ニ書目三冊を送る、十九日鳥尾浜尾氏ト共ニハルトマン氏ヲ訪フ、編外、○十八日ヨリ

二十四日マテ伯林府ニ物理医諸専門會アリ、即チ准會員トナル、○廿五日午後二時三十八分伯林府ヲ發シ、夜十時半プレスラウ府ニ着シ、翌日十時ベンノー、エルドマン氏ヲ訪ヒ、哲學上ノコトヲ論談スルコト約一時間、コレヨリ博物館并ニシユライエルマー

ハル氏ノ像ヲ觀テ歸ル、午後四時十分發翌日(即廿七日)午前六時半維納府ニ着Pension Fischer, Landesgerichte str. 18ニ投ジ、東洋学会會員トナリ、其總會ニ出ヅ、二時頃畢ル、○廿八日東洋會ニ出

ヅ、此夜文部大臣ガウチ氏ニ招燕セラレ、○廿九日朝鳥尾氏ヲ其旅館ニ訪フ、午後「ビュルゲルマイスター」ウール氏并ニ澳國皇帝ノ叔父「エルツエルツオグ」ライネル氏ニ招燕セラレ、○三十日鳥尾氏ト共ニ東洋會ニ出ヅ、夜日本公使館ニ招燕セラレ、鳥尾

太田諸氏皆會ス、

○十月一日、鳥尾氏ト共ニスタイン氏ヲ訪ヒ、大ニ東西哲學ノ關係差別ヲ論ズ、○二日東洋總會ニ出ヅ、夜會頭商務大臣クレマー氏ニ招燕セラレ、鳥尾氏亦來ル、此日東洋會畢ル、○三日再び鳥尾氏ト共ニスタイン氏ヲ訪ヒ、東西哲學ノ關係差別ヲ論ズ、氏窮ス、夜演劇ヲ觀ル、○四日博物館ヲ觀市街ヲ遊覽シ、鳥尾氏ト別ル、

○五日朝七時三十五分維納府ヲ發シ、夜ミユンヘン府ニ着旅亭ニ投ズ、翌日 Pension Watenburg, Briener str. 47ニ転ズ、此日展画場ヲ觀ル、○七日再ビ展画場ヲ觀夜森林太郎氏ト共ニ演劇ヲミル、○八日朝審美学家モリツツ、カリエレ氏ヲ訪ヒ、審美学家ヲ論ズ、ソレヨリ展像場ヲ觀ル、此日午後五時二十八分發翌朝七時三十八分ドレステン府ニ着旅亭ニ投ジ、展画場ヲ觀ル、○十日再ビ展画場ヲ觀、夜演戲ヲ觀ル、極メテ美極メテ妙、○十一日展像場并ニ日本宮殿ヲ觀、午後二時二十七分發、午後六時三十分伯林府ニ着再ビエンゲルプレヒト氏ニ寄寓ス、○二十二日、哲学家ギズチキー氏ニ招燕セラル、○二十三日、朝、夢ニ一首ヲ得テ忽チ醒ム、時ニ已ニ茫乎タレトモ追想推敲シテ之ヲ記ス、云ク、白雨濛來急、於箭、眼前佛像看不見、岩腰中斷露、半天、雲鎖、遠景、空怪變、夢中山頭ニアリシユヘ詩中及之、此日三宅秀出發、萊布室府ニ赴ク、○二十四日小牧昌業寺田弘二氏來ル、○二十四日、品川公使ニ招燕セラル、○二十五日、大学開校、此夜小牧寺田二氏ト談話久之、○三十日、北海道庁官吏鈴木氏并ニ寺田望南來ル、共ニ東西政体ヲ論ズ、○三十一日、妻ニ書状ヲ送ル、

○十一月三日天長節ニ当ルヲ以テ在伯林日本人公使館ニ会ス、來者約七十人、谷干城氏ニ会ス、○四日谷大臣ヲ其旅館ニ訪ヒ、日本政略ヲ論ズ、○十日再ビ谷大臣ヲ訪フ、○十八日三タビ谷大臣ヲ訪フ、

○十二月二十一日文部省ヨリ独貨八百二十拾六麻二十布領取○此日博

多中洲ニ画本ヲ送ル、○二十二日閉校、○朝比奈ヨリ書状ヲ受取ル、○二十六日、有感賦七古一篇、抒実情也。

光陰疾ニ於箭、一年又将レ暮、長天雪漫々、吹レ窓風激怒、丈夫無ニ寸業、用浪遊異域住、古人蹤難、追、幾年等間度、三十又加レ一、此日独自顧、豈可レ耐ニ羞慙、既往皆錯誤、大夢半生間、悠悠無レ所レ悟、至レ今知レ前非、蹶然如レ夢寤、遂事不レ可レ追、將來其当レ務、紫綬、非レ可レ期、菲才、成レ學、書、矜式、又難レ望、僻村、好教、孺、柳条深処、居有レ時探、詩句、大願、少年志、唾棄、付、塵汚、

二十七日、品川公使ヲ送ル、○仏国留學願被聞届、○三十一日、朝比奈氏ニ書状ヲ送ル、

○丁亥明治二十年一月六日開校、○九日朝比奈策作二氏ニ書状ヲ送ル、○十六日、ウエーベル氏ニ招燕セラル、○二十二日、寺田望南訪來、○此日五絶一首ヲ賦シテ志ヲ述ブ、云ク、幾歲嘗ニ辛苦、工夫漸入レ深、欲レ興ニ新哲學、先始、自、中心、○二十二日至二十七日微ニ胃病アリ、六日ニシテ全ク癒ユ、

○二月十三日孝女白菊詩訳成ル、独乙博言博士Florenz之ヲ訳ス、○此日寺田望南ニ書状ヲ贈ル、○十六日小松原英太郎氏ニ招燕セラル、千賀氏亦來会ス、○二十一日千賀氏來訪、○二十二日、学資金二百六十七円五十銭ヲ領取ス、此月ノ末、佐藤教師ヒオ、レレ氏ノ約ヲ解ク

○三月九日閉校、○午後大森氏ノ為メ離筵ヲ開ク、九日有賀氏ヲ拉シテ、ギ、スチキー氏ヲ訪フ、○十日文部大臣森有礼氏、東洋学校教師云々ノ儀ニ付願書ヲ送ル、○薄暮ハルトマン氏ニ招燕セラル、盛ニ哲學上ノ事ヲ論ジテ還ル、○十四日、伯林大学ヲ退校ス、○此日文部大臣二届書并ニ留學延期

ノ願書ヲ送ル。○二十四日、哲學家ギズチキー氏ニ招燕セラレ、維納府ノ哲學女史Dr. Druskowiczニ遭フ、有賀氏亦來會ス、○二十六日九時四十一分、伯林府ヲ出發シ、二十七日、六時午後七時半巴里府ニ着シ、Hôtel Violet (Passage Violet)ニ寓ス、二十八日暮ニHôtel St. Sulpiceニ移寓ス、原田鶴田二氏亦同旅舎ニアリ、○三十日Mr. Doutheヲ訪フ。共ニ市街ニ散歩ス、○三十一日Mr. Fenellosヲ訪ヒ、東西學問ノ景況ヲ論ズ、不_レ尽、再會ヲ期シテ別ル、明治廿年三月

第四年期

○四月七日仏人Arcambeau氏ヲ一週ニ時宛雇ヒ、仏語ヲ學ブコトヲ約ス、○十一日谷大臣ヲ其旅館ニ訪ヒ、大ニ政治ヲ論ズ、○十三日日本公使館ニ至ル、夜Bd. Capcineニ於テJules Simon & Ad. Frank二氏ノ演說ヲ聴ク、○十四日再ヒ谷大臣ヲ其旅館ニ訪ヒ、大ニ日本政治ノ改良法ヲ論ズ、○十五日博多中洲伯兄并ニ九鬼公使ニ書狀并ニ写真ヲ送ル、○十五日哲學者Michons氏ニ招燕セラレ、獨國人ラツアリ氏ト共ニ其招ニ応ジ、興ヲ尽シテ還ル、○十七日日本人會ニ於テ比較宗敎論ヲ演說ス、○十八日Sorbonne大學開校ス、○十八日始メテPaul Janet氏ノ講義ヲ聴ク、傍聽人約百名、中ニ妙人佳人アリ、大抵ハ外國ノ人ナリト云フ、○二十日Taine, De l'Intelligence, le Tome 1ノ讀メス、○二十一日仏人Negri氏ト共ニ法科大學ニ於テBeauregardノ講義ヲ聴ク、氏盛ニ自由貿易ヲ主張ス、○二十二日Renanノ講義ヲ聴ク、來者皆倦厭シ、欠伸

スル者アリ、新聞ヲ讀ム者アリ、手仕事ヲスル者アリ、睡眠スル者モ少ナカラザリキ、○二十五日Nourissonノ講義ヲ聴ク、氏盛ニ進化論ヲ駁ス、感服スル者少シ、○二十六日、Lévequeノ講義ヲ聴ク、益スル所ナシ、○三十日Caurèsノ講義ヲ聴ク、羅馬法ヲ説ク最モ詳ナリ、Paul Janet, Nourisson, Ribotノ講義ヲ主トシテ聴クコトニ定ム、敢テ一々記セス、○先是即チ二十九日日本公使館ニ於テ関直彦氏ニ遭遇ス、共ニ政治文學教育等ノ事ニ就テ談話ス、此日氏來リテ余ヲ訪フ、因テ共ニ法科文科諸大學ヲ見リテ又共ニ談論ス、

○五月四日Masperoノ埃及學講義ヲ聴ク、○七日Foucauxノ講義ヲ聴キ、氏ニ就テRamayanaヲ讀ムコトヲ約ス、○八日浜尾氏ヲ其旅館ニ訪ヒ、大ニ論ズル所アリ、○十三日Taine, De l'Intelligence第二冊ヲ讀了ス、○井上田了并ニエンゲルブレヒト婦人ニ書狀ヲ贈ル、○夜再ヒ浜尾氏ヲ其旅館ニ訪ヒ、大ニ政治文學等ノ事ヲ論ジテ別レ、千本氏ト共ニ外出夜半ニ及テ帰ル、○十四日夜青山氏來ル、○十六日、三ビ浜尾氏ヲ訪フ、○十八日岡倉氏來、○二十日、清人王寿昌高而謙諸氏ニ邂逅ス、○二十二日岡倉氏ト別ル、此日井上田了氏ニ書狀ヲ送ル、○二十四日、文部大臣ニ屆書文部會計局長久保田氏ニ書狀ヲ送ル、○二十七日、ブローコー氏ヲ訪フ、○此日朝比奈氏ニ書狀ヲ送ル、○三十日Taine, Philosophie de l'artヲ讀了ス、

○六月六日、ソルボンヌ大學ニPaul Janetアリ、會テLa Cause finale, La Theorie de Moral(米國ノ婦人Miss Chapman之ヲ訳シテThe

theory of Morality, & The final causeト題セリ)ヲ著シ、唯心論ヲ唱ヘテ方今歐洲ニ流行スル唯物論ニ抵抗ス、此日、氏ヲ訪フ、

余云く、敢て君の哲学を問ふ、

氏云く、余ハ唯物論者にて、専ら方今の唯物論者に敵するものなり、

余云く、仏国大学にハ唯心論者多きに非ずや、

氏云く、然り、方今大学の哲学教授ハ大抵唯心論者に属せり、即ちヌリツソン、カーロー諸氏の如き皆然り、

余云く、La Critique philosophiqueと題せる哲学雑誌をの編輯人たるルヌヴィエ氏ハ何学派の人なりや、

氏云く、彼ハカント学派の人なり、

余又問て云く、バルテレミー、サンチレーヤ氏ハ如何、

氏云く、曾てアリストートの全集を訳せり、一箇の翻譯家たるに過ぎず、且つ夫れ既に老たり、

余云く、リボー氏ハ大学に在りと雖とも唯心学派に属せず、却て唯物論学派に属するに非ずや、

氏云く、然り、氏ハ原とテイン氏に動かされ、全く実験学派に属するものなり、余又問て云く、ワセロー氏ラヴエイソン氏ハ如何、

氏云く、唯物論者なり、既に老たり、既に其業を畢へたるものにて復々哲学上に為す所あるに非ず、

余又云く、ワセロー氏ハ如何、

氏云く、万有論者なり、亦既に老たり、該氏の哲学を知るには「Metaphysique et la Scienceを善しとす、氏が頃日世に公にしたる

Le nouveau Spiritualismeハ晦渋深艱にして、又以前の持論と少し異なる点もあり、

余云く、該書ハヘーゲル氏の書の如く、晦渋深艱なりや、

氏云く、左様に困難なるに非ず、
又云く、方今独乙にてヘーゲルを読むもの多きや、

余云く、殆ど稀なり、然れどもカントを読むものハ猶ほ少しとせざるなり、

氏云く、近世独仏国にカント学派起れり、ブートルー氏の如き、即ち之を代表するものなり、

余云く、独乙にても亦然り、今より二十年前頃フヒツセル、チエラー、リーブマン、ランケ諸氏一時盛にカントに復帰すべしと唱へしより所謂カント新派(Neo-Kantisme)を生じ、今至りて、此学派に属する人に乏しとせず、然れども往々其説を變ずるものもあり、

チエラー氏の如きハ元來ヘーゲル学派なれども中頃カント学派となり、今ハ頗る実験学派に傾向せり、然れども彼れ之を言ふを欲せず、フヒツセル氏の如きも、其元を言へバヘーゲル学派なれども、今ハ寧ろカント学派の人と謂ふを得べし、

氏云く、哲学者の説を變ずる如し此か、噫、

余又云く、伯林大学の如きハ、チエラー氏が実験学派に傾向してよりドイセン氏を除くの外実験学派に非ざるなし、

氏云く、是れ方今各国哲学の景況なり、

余云く、誠に然り、然れども独乙の如き猶ほ唯心論を主唱する大家に乏しからず、近世唯心論を以て一代に有名なり傑出せしもの

ハロツツエ氏なり而して学問該博、氏ヲ凌駕せんと欲する者ハル
トマン氏の如きも、亦唯物論に反するものなり、フヒツセル氏亦
唯物論に反してカントを主唱し、有形無形両般の学にも精通
せるヴント氏の如きも、極めて深思精慮の人にて決して唯物論者
に覺せざる人なり、其他カント、ヘーゲル諸氏の学を奉じ、唯物
論者に反する者亦屈指に遐あらざるなり、

氏余に問て云く、独乙にてハ如何なる人の講義を聴きしや、
余云く、主としてフヒツセル、ヴント、チエラー、三氏の講義を聴
けり、

氏云く、是れ方今独乙哲學家の錚々たるものなり、

又云く、フヒツセル氏弁舌に巧なりと聞く、果して然るや、

余云く、然り、氏ハ弁舌最爽快にして、人をして傾聴已む能ハざ
らしむ、

氏云く、氏ハ唯々哲学史のみを講ずるなるべし、

余云く、哲学史中にも、殊に近世哲学に精通し、其他論理学の
如きも、亦間々講ずることありと雖も要するに、氏ハ哲学史家に
して、固より一家科目のシステム学派あるに非ず、又近世各国に起れる
実験学派の説に至てハ茫乎として知らざるものなり、

余話柄を転じて云く、君著ハす所の La crise philosophique ハ近世
仏国の哲学を知るに便なる書たるべし、

氏云く、該書ハ既に陳旧く、今日の景況と異なるものもあり、

氏又余に問て云く、君独國哲学書中如何なる書を読みしや、

余云く、主として、デカルト、コント、ルナン、テイン等の書を
既読せり、コント氏の書行文率ね行文冗漫にして変化少く、通
覧に堪ず、且つ其科学上の説如き大抵皆陳腐に属し、之を読むも
亦其益なし、テイン氏の書ミル、ペイン、コンチャック諸
氏に本き。奇説を立つと雖も、又速しせる論も少からずして、頗
る危殆なる唯物論に陥るものと謂ハざるを得ず

氏云く、テイン氏稍々唯物論的の論者なり、

又云く、仏國にてハクゼアン氏の書行文流暢にして義理明晰、最
も哲學者に益あり（ジアーネー氏ハ方今ラヴエイソン、ジュールシモ
ン、諸氏と同じく、クゼアン学派の人ゆへ斯く言ひしなり）、

余云く、僕未だクゼアン氏の書を読まず、然れども聞ク如きハ、
氏曾テ独乙に行きヘーゲル氏に学び、能く其旨を知らざる中に独
國に帰り、一知半解のヘーゲル哲学を講ぜしことゆへ、其書大率
義理矛盾し行文佳偶すと、

氏云く、話柄を転じて云く、君教授たりしことなきや、

余云く、然り、曾て東京大学に於て東洋哲学史を講ずること。一年
評、

氏云く、日本にも、古往來哲學者ありしや、

余云く、今より大約二百年前頃哲學者輩出し、往々一家の学を唱
へたり、柱下漆園二氏の学の如きハ殆ど之を唱ふるものなく、大
抵、厄山（砂田實成）、瞿曇二氏の学（佛學）に本きて起れり、然れども亦間々自家独得
の見なきに非ず、（即ち伊藤仁齋（撰）、庭翰（撰）、吉齋漫録（撰）。に本き仁義
即道也之論を唱へ、物徂徠仁齋と同じく古学を唱ふと雖とも、亦

大に其趣を異にし、半ハ荀子の性惡篇(トク)に半き、半ハ楊升菴が丹鉛
 總録に拠り、弁道弁名論語徴を著ハし、礼樂即道也之論を唱へ、
 貝原益軒羅正菴に淵源すと雖も、亦自ら多少一家の見を立て、大
 疑録を著ハして程朱の説を疑ひ、山崎垂加晩年に至り、神儒仏を
 混同し、一類無類の折衷学派を成す、後の大塩平八王陽明余姚の
 学を奉ずと雖も、亦自ら一機軸を出し、所謂大虚心説を唱ふるが
 如きはれなり(是等の事ハ僕が他日東洋哲学史中に詳言すべし)
 是より氏種々東洋哲学に就て尋問したれども、皆之を略す。

○

- △* 一 独乙語を充分に学修する事
- △* 一 西洋哲学の蘊奥を窮むる事
- 一 大学に於て卒業する事
- 一 哲学上の論文を作る事
- △* 一 仏蘭西語を学修する事
- △* 一 伊太里語を学修する事
- △* 一 羅甸語を学修する事
- △* 一 希臘語を学修する事
- △* 一 独乙諸老先生に接する事
- △* 一 物理学を学修する事
- △* 一 生物学を学修する事
- △* 一 欧洲の現状を洞察する事
- △* 一 梵語を学ぶ事
- △* 一 法蘭西に行く事
- 一 支那哲学史ヲ著ハスコト

- * 一 英国に行く事
- * 一 伊大里ニ遊ブコト
- * 一 瑞西ニ遊ブコト
- * 一 澳國ニ遊ブコト

○

Geschichte der orientalische Philosophie 5 B. d.

1. Theil...Geschichte d. japan. Philosophie
2. Theil...Geschichte d. chin. Philosophie
3. Theil...Geschichte d. ind. Philosophie
4. Theil...Geschichte d. arab, Hebraisch, Persische, Philosophie

&C.

Geschichte d. europe Philosophie 2 B. d.

N. System d. philos.

1. Grundriss d. allgem. Philosophie
2. Grundriss des Psych.
3. Grundr. d. Ethik
4. Grundr. d. Polit.
5. Grundr. d. Aesthetik
6. Grundr. d. Theol.
7. Grundr. d. Nat. Phils.
8. Grundr. d. Logik

○

- 心理新説 訂正スルコト序文ヲ少シク改ムルコト 四卷
- 巽軒詩鈔 訂正スルコト 二卷
- 英華字典 増訂スルコト 合一本
- 倫理新説 減板スルコト 七卷
- 西洋哲学講義 減板若クハ訂正スルコト 一卷
- 哲学字彙 再版三版増訂スルコト 四卷
- 論理説約 桑田氏訳 一卷
- 論理新論 添田氏訳 三卷
- 新体詩鈔 再版 五卷
- 再版 一卷

Japanische Grammatik

Japanisches Wörterbuch

Geschichte d. Jap. Literatur

Geschichte d. Chin. Literatur

Dramatische Werke

Sintōismus, als Volks religion der Japan

Sitten und Gebrauche der Främen in Japan

臨赴独逸留別諸子

歲之甲申春二月。滿城梅花香。吾以此時整行李。孤身欲向泰西
 發。草余新詞未推敲。讀殘之書皆亂拋。好為三年不鳴鳥。喋々何必
 解人嘲。苟有誠心無不遂。泣神驚鬼亦容易。世上毀譽不遑論。自今

只当成我志。」水閣会友開別筵。美人勸酒弄管絃。清唱一曲倒金壺。
 歌扇舞衫紅亂旋。」丈夫何洒兒女淚。須傾巨盃取欲醉。吾志一決屹如
 山。勿說海外風土異。」君不見独逸之國太盛昌。武威桓々稱至強。賢
 哲況復不知數。恰如聚星爭德光。我今渡万里波濤遊其地。一世俊髦
 欲尽把臂。嗚呼泡影之名蠅頭之利何足云。天下快樂莫勝此事。

○ 篷窓先見旧時容。先一作忽有豁然開我胸。旭日為誰離海水。旭一作半天
 映出玉芙蓉。映一作城

歲乙酉二月初二萩原君以当其令子午生君誕辰。開賀筵。招燕諸
 友。余亦廁席末。乃賦七絕一首以祝焉。

萩原国手有佳兒。名命午生尤得宜。豈啻康強如健馬。也当進道速於
 馳。午馬也
軼結故友

I Verlängerung der Lehrzeit

II Philosophie

- 1) Metaphysik
- 2) Psychophysik (Psychophysik)
- 3) Geschichte der Philosophie
- 4) Aesthetik
- 5) Ethik
- 6) Rechts philosophie
- 7) Religions philosophie
- 8) Geschichts philosophie

9) Logic und Erkenntnistheorie

10) Naturphilosophie

III Anthropologie

IV Ethnologie

V Philologie

VI Physiologie

VII Pädagogik

○此日又ルナン氏を仏国大学に訪ふ、
(明治二十年六月六日)

余問て云く、方今仏国哲学の景況如何、

氏云く、方今仏国にてハ哲学衰退の世なり、我輩の知識宇宙間に在りてハ、極微分子に過ぎざるを以て、哲学の新体系を成す能はず、又新体系を成すに疲羸せり、「△然レトモ哲学ハ万学の綱要にしてことに欠べからざるものなり」

余云く、君ハ唯物論者なりや、唯心論者なりや、抑々又。一家の学ありや、

氏云く、僕自ら之を知らず、曾て哲学問答録を著ハし、哲学上の見を述べ■たれども、未だ其如何なる学派に關係あるをやを知らず、

氏又云く、唯物唯心杯と世に喁々言ふハ畢竟言語上の争に過ぎざる事にて、必ずしも其実然く差別あるものに非ず、■何者の寧馨兒か曾て実物に就き、抽象して種々の名目を付けたるに、後人其名目を以て誤て実物となし、争論百出すと雖も、名目元と実物に

非ずして、一種の抽象に過ぎず、然るに大学の教授諸氏ハ比々好で斯様の言語上の争を為すことなるが、是れ亦一の消閑の一計なるべし、

余云く、君の言ふ所甚だテイン氏が知識篇に論ずる所と相似たり、氏云く、テイン氏ハ方今第一流の哲學家にて、其論ずる所大に肯綮に当れり、僕大に其説を善とす、

余云く、僕曾て君の耶蘇の伝(…)を読みしに、行文極めて明瞭にして裨益する所多かりき、

氏云く、該書にハ僕の哲学上の所見を述べず、哲学上の所見を述ぶるものハ哲学問答なり、(此時氏余に其書を付与す)、

余云く、君初め教法家にてなりしに、後転じて言語学者とならるにあらざや、

氏云く、然り、然して哲学にも涉獵す、然れども専修する所ハ「セミチック」語学なり、少々ハ「サンスクリット」にも通ぜり、

余云く、君曾て「セミチック」の原書に拠り、曲引旁證、耶蘇教史を著ハせるが、抑々君ハ耶蘇教を信ぜらるゝにや、

氏云く、否、耶蘇の事ハ仏マホメット等と同じく歴史上記すべき人物なれど哲學者の信すべきものに非ず、

余云く、君ハ耶蘇経を記号として信ぜらるゝや(独乙の自由思想家と称する教法家ハ耶蘇経を唯々一種の記号として信ずる故

之を問ひしなり)

氏云く、否、毫も信ぜざるなり、信ずるに足るものなきなり、其他問答せし所多けれども皆之を略す、ルナン氏ハ顔面広豁にし

て策の如く、鼻梁巨大にして芋に類し、両月頬彭亨殆ど垂下せんにし、腹便々脚短々、頗る行歩に艱めり、氏が大学にて講義するや室の一隅にて独言譚語を為すが如く、音調卑くして、甚だ聴取し難きを以て、多くハ人皆欠伸睡眠、多くハ華胥の遊を為すなり、明治十五年六月

○七日、ラシン氏の Mithridate, Phéde 二篇を讀了す、○十日、日本公使館に至り、原敬氏と政治を談す、○十一日、薄暮「セイ」河畔をに散策す、偶々数百の挑灯連綿として行くを見る、近きて之を諦視するに市の年少相連り、後者在車前者をの衣端を捉り、右手挑灯を持し、各 amusez, épaisez と呼んで行くなり、仏国人の性情亦以て察すべし、○十二日 Hotel St. Sulpice を辭し、chez M. Mirman, rue Breain 18, Montrouge に移転す、「此頃より長く歐洲に滞在し、専ら学芸に縦事し、著作文章を以て家を成さん事に志す、○十三日、ワセロー 氏を訪ふ、氏云く、余独乙も解せず、英語も解せず、然れども亞歴山大学派の事ハ頗る研究せり、プロテアン ポルフヒリー プロクルユ 三氏最も大家にして プロクルユ 氏即ち亞歴山大府の亞里斯特篤なり、余云く、ヘーゲル 氏又大に プロクルユ 氏に得るものあり、氏云く、ヘーゲル 氏ハ独乙のアリストートなり、然れども亦些の疵瑕なきに非ず、余問て云く、仏国 方今の哲学唯物論に傾向せるや將た唯心論に傾向せるや、氏云く、唯物論なり、余又云く、レナン テイン 二氏ハ如何、氏云問、テイン 氏ハ甚だ強きものと謂ふべし、レナン 氏の如きハ文を能くすと雖も、皆美婦人の為めに著述する所たり、其他ハ氏多く評せず、余云く、ジュル、シモン 氏ハ君ト同じく亞歴山大学派の

歴史を著ハす、其得失如何、氏云く、敢て之を評するを得ず、別に臨で氏云く、君甚だ歐人に類し、毫も支那人に似ず云々、「是より Leon de Rosny を訪ふ、在らず、」尋で文科大学に至り、Ber-saine 氏の講義を聴く、印度の年代記を論ずる事最も詳密なり、「巴里の学生多くハ浮薄輕躁、哲学の如き沈思深慮を要するの學ハ講ずるものなし、因て五絶一首を賦して云く、玉樓、金殿、少女、美於花、」哲学在誰講、狂奔人驅車、○十七日、Th. Ribot を訪ふ、氏詳細に歐洲各國哲学の景況を説く、大に益する所ありき、「此日夜 ミシヨニス 氏に招燕せらる、興を尽して帰る、○十八日、ミシヨニス 氏に招燕せらる、「此日復た ロニー 氏を訪ふ、他に約束あり、談話を尽さず、○十九日、日本人会に至り、美術論を演述す、茲にて丸山作樂氏と遭逢し、再会を期して別る、○二十日 Waddington 氏の講義を聴く、○二十一日再び ロニー 氏を訪ふ、氏病氣にて会晤を得ず、○二十三日 Boutroux を訪ふ、○二十四日、留学延期の事六ヶ敷よし申来れり、「此日加藤銀行局長と談話す、(明治十九年) ○二十五日、清人林振峯を訪ふ、○二十六日、前の仏国 文部大臣 Jules Simon を訪ふ、藏書百万、陳列粲然、大率皆新標美裝、絶て読ざるが如く、徒に人に示すが如く、独乙哲学家の古書新映狼藉紛雜、或ハ開き或ハ巻き、或ハ牀上に置き、或ハ架上に列し、日々様々、検閱熟読、已きざるものと大に逕庭あるが如く覺ゆ、余曰く、君クゼアン氏に学べりと聞く、果して然るや、氏曰く、然り、

余曰く、近世貴國にて有名なる哲學家中クゼアン学派の人多く、

シアネー フランク二氏亦クゼアン氏を崇奉するに非ずや、
氏曰く、該二氏ハクセアン学派の人なれども、直にクゼアン氏に
学びしに非ず、

余曰く、ジュツフロア グミロン セイツセー諸氏ハ皆クゼアン
氏に学ぶ、蓋し君の知己なりしなるべし、

氏曰く、然り、皆余の知己にて同時に学問せしものなり、

余曰く、君 Histoire de l'École d'Alexandrie を著ハせしに非ずや、

氏曰く、然り

余曰く、ワセロー氏亦同様の著あり、頗る異同あるにや、

氏曰く、余ハプロテアン ジアムプリキユ ポルフヒル プロク

ルユの事を記し、ワセロー氏と多少異少同あり、

氏又曰く、余著ハす所 La Liberté, La Liberté de Conscience 等部

数甚だ多し、

氏又曰く、君大学にて何人の講義を聴かる、にや、

余曰く、シアネー リポー諸氏の講義を聴けども、是れ固より主

要の事に非ず、生ハ自ら我室に於て独り研究するを常とす、

氏曰く、生曾て日本に在る時東洋哲学史編纂を思立ち、支那の部

ハ半ハ成^{余文}成就せり、然共皆日本語にて記せることゆへ、他日欧

洲の語にて公にすることあるべし、

氏曰く、支那の哲学ハ道德の事のみならずや、

余曰く、多くハ道德を論ずれども「コスモロジー」等の事もなき

に非ず、

氏曰く、^{フランスネター}大学院に Barthelemy St. Hilaire, Adolph Franckl 二氏あ
り、皆東洋哲学に通ず、

余曰く、Barthelemy St. Hilaire ハ梵語に通じ、Adolph Franckl ハ

希伯拉に通ず、然れども支那日本の哲学に至てハ、^{ニキストレームオウラン}歐洲全国一人の

精通するものなきなり、去年維納府東洋学会にも出で広く万国の

東洋学者と会合したれども、^{ニキストレームオウラン}極東洋諸國の哲学史を知るものを見

ざりき、尤も孔子の学ハ少く歐洲に知れたれども老子に至てハ知

るもの稍少く其他諸子百家の学ハ未だ歐人の窺得ざる所なり、

氏曰く、Bibliothèque nationale 并に学士会院の文庫に蔵書甚だ多

し、君往て一覽セバ益多かるべし、云々、

○二十七日、米人 Houghton を訪ふ、^藤帰途河島氏を訪ひ、哲学を談じ

て帰る、○二十八日、Felix Ravaisson 来訪と共に俱ニ哲学を論ず

る約一時間、氏大ニ Ladeher, Fouillée 二氏を推重し、云く、後者

ハ書き過ぎるの弊あり、前者ハ書こと少きの弊あり、^藤仏國一般の

哲学を論ずる大約一時間にして去る、○二十九日フーコウ氏を訪

ふ、氏詳細に其著蔵書中仏教に関係あるものを出して示す、○三

十日、藤島氏来訪、

○七月一日学士会院ニ至り、ラウエイソン氏ヲ訪フ、氏ノ紹介ニヨ

リ Alf. Maury, Saint-Denis, Bergaigne 諸氏ニ逢フ、^{Scheler}「此夜海老田

丸山二氏ヲ訪ヒ學問一般ノ事ヲ説示ス、○四日、海老田、丸山、

加藤諸氏ト日本政治ノ方向等ヲ論ジテ帰ル、○六日、元老院議官

石田并二稻垣二氏来訪、○八日伊藤藤谷両大臣并上^藤函書頭浜尾大書

記官ニ書状ヲ送り、文部大臣ニ留学延期ノ願書ヲ送ル。○九日原敬氏ニ招燕セラレ、大石正巳斎藤修一郎二氏ニ遭遇シ、日本ノ政事ヲ談論ス。○十日丸山作樂氏来訪ス、共ニ日本語ヲ論ズ、午後丸山作樂ト共ニ閑院宮ヲ訪フ。○十五日、三好司法次官并ニ博多井上侃齋ニ書状ヲ送ル。○十六日、稻垣津田二氏来訪。○二十三日、La Philosophie en France au XIX^e Siècle de Félix Ravaisson^ト読了ス。○二十四日、黒田、藤島、甲賀、Hasegawa^{諸氏}来訪。此日、Léon de Rosnyヲ訪ヒ、東洋語学并ニ東洋哲学ノ事ヲ談話ス。○二十五日、米人ホフ氏ヲ訪ヒ、共ニ英仏兩國ノ哲学ヲ論ズ。○二十八日、Rousseau, Le Contrat Social^ヲ読了ス。此夜、藤島氏来訪。○三十一日夜、藤島氏来訪。

○八月一日、au bon marché^ニ至ル。○二日、Montesquieu, de l'Esprit des Lois, 第一冊ヲ読了ス。○四日、米人ホフ同ワオード^二氏来訪、共ニ哲学ヲ論ズ。○五日、妻并ニ黒田長成侯ニ書状ヲ送ル。○六日、萊布寧府ノマンスフェルド氏ニ書状ヲ送ル。○七日、有賀長雄、エンゲルブレヒト婦人、博士ランゲ三氏ニ書状ヲ送ル。○十二日Montesquieu, Esprit des Lois^{第一冊ヲ}読了ス。○十三日、高橋茂来ル。此日黒田長成侯ニ書状ヲ送ル。○十九日、Montesquieu, Esprit des Lois^{第三冊ヲ}読了ス。○二十日藤枝氏来訪。○二十一日、日本人会ニ至ル。○二十二日、夜千本氏ト共ニ、Eden-Theatreニ至ル。○二十三日、有賀長雄来訪。○二十八日、岩下氏ヲ訪フ。○三十一日、Les Aventures de Télémaque de Fénelon, 2 vols. ヲ読了ス。

○九月三日、高橋達藤島了穩二氏^ニ書状ヲ送ル。○四日、米人ホフ氏ニ招燕せらる。○五日、文部より独貨百四拾四麻七拾布英貨拾志壹片を領取す、是れ伯林より巴里に至る旅費なり。○七日、Philosophie du droit civil de M. Franck^ヲ読了ス。○八日、坪井土方二氏に邂逅す。○十日、ランゲ、エンゲルブレヒト二氏に書状を送る。○十一日、有賀氏ト共ニBois de Boulogneニ至ル。○十二日、Dialogues philosophiques de Renanを讀了す。○十二日、Louvreニ至ル。○十五日、藤島氏来ル。○十八日、再ビ有賀藤島氏ト共ニLouvreニ至テ絵画ヲ觀「午後日本人会ニ至テ哲学ノ社会ニ關係アル所以ヲ論ズ。○十九日、Saint Cloudニ至リ、千本氏ニ會ス。○二十日、Versaillesニ至リ、絵画彫刻ヲ觀ル。○二十三日、コルネイエ氏ノLe Cid, Cinq^二篇ヲ讀了ス」此日Arcambeau氏ヲ解雇ス。○二十四日、公使館ニ至リ、原氏ニ逢フ。此日書籍函ヲ送ル。○二十五日、有賀氏ヨリ来ル。○二十六日午前七時半、巴里府ヲ出發ス、荷物運送賃二十五フラン。汽車賃九十三フラン。藤島松井二氏送來。○二十七日午前七時五十五分伯林府ニ到着、再ビ婦人エンゲルブレヒト氏ノ内ニ投ズ、有詩云、邂逅一作遭遇

邂逅遊異域。又入伯林城。邂逅多知己。宛然故国情。光陰何忽々。落葉使人驚。此志雖遼遠。自今期必成。』

三十日、カツセル氏ヲ訪ヒ、大ニ宗教ヲ論ズ、「薄暮坪井氏ヲ訪フ、

明治二十年

○十月一日、繪画共進会ニ至ル、○二日、ランゲ氏ト共ニ教授ザハ
 ウ氏ヲ訪フヒ、東洋学校講師(Lector)タルベキ条約ヲ結ブ、○四
 日、文部大臣森有礼、同會計局長久保讓二氏ニ書状ヲ送ル、「此日
 ハルトマン氏ヲ訪フ、(續次)普国文部大臣ゴスレル氏ヨリ東洋学
 講師ニ命ストノ辞令書ヲ受ク、」○七日、ウエーベル氏ヲ訪フ、
 森文部大臣ニ申報書ヲ送ル、○十日、独人フリース氏ヲ雇ヒ、羅
甸希臘ヲ学ブコトヲ約シ、此日ヨリ始ム、「此日、朝比奈氏ニ書状
 ヲ送ル、○十一日、森大臣并ニベツク氏ニ書状ヲ送ル、○十三日、
 日本文部省ヨリ銀貨二百五拾五円(此仏貨千四仏七拾山)ヲ領収
 ス、「有賀氏ノ為メレーマン并ニハイゼ氏二百二十二麻克ヲ払フ、」
 此日原宮川加藤田島四氏ニ書状ヲ送ル、宮川氏ニハ五百フランヲ
 送ル、「此日有賀氏ニ書状ヲ送ル、○十五日、始メテ東洋学校ニ至
 リ、校長ザハウ氏ニ逢フ、○二十一日、哲學家チエラー氏ヲ訪フ、「
 仏国日本人会ノ名譽員ニ推撰セラル、」田島藤島二氏ニ書状ヲ送
 ル、○二十二日、始メテ普国文部大臣ニ面謁ス、時ニ支那人関桂
 林幡飛声二氏ニ逢フ、○二十五日、ブレマン婦人ト共ニLette-
vereinニ至ル、○二十七日、東洋学校開校式アリ、文部大臣ゴスレ
 ル、グラフピスマルク大学長シユウエンテネル東洋学校校長ザハウ
 氏ノ演説アリ、「此日、ノアク氏來訪、共ニ日本文典ヲ論談ス、○
 二十九日、日本人会ニ至ル、○三十日、ランゲ センカ二氏ヲ訪
 フ、○三十一日、始メテ開講、聴者十五人アリ、(1)Otto Alpheis,
 (2)Otto kaestner, (3)Leopold Marcuse, (4)Gustav Richert, (5)
 Hermann Plaut, (6)Heinrich Faltin, (7)Franz Dohler, (8)Fritz

Thiel, (9) August Gramatsky, (10) Eduard Mannchen, (11) Carl
 Florenz, (12) Dubs, (13) Hange, (14) Beck, (15) Michel 是ナリ、」
 此夜ブレマン婦人ニ招燕セラル、

○十一月三日、潘飛声詩二首ヲ寄ス、其一云、「久識嶗州山水美。才
 人多住墨江旁。我来泊欧洲棹。喜見風流哲次郎。」其二云ク、
 「土露天街何処尋。日深梁。月落蕭森。定知孤館無人夜。一点涼
 燈。独自唸。」ト、○五日、次韻寄万松山人。其一云。番禺才子抱
 雄志。万里來遊德水旁。只怕江垂柳外。有人月夜思蕭郎。」
 其二云。散蘇西舍引節尋。驚絕君才太鬱森。愧我不文詞腸淡。新
 詩不及草虫吟。○十一日、Kaiser Panoramata 觀ル、○七日、
Reichs-Past-Museumヲ觀ル、○十一日、ミレル婦人ニ書状ヲ送
 ル、○十二日、教授ウエーバル氏ヲ訪フ、「此日朝比奈氏書状ヲ送
 ル、○十三日、与葛祿伯共訪関桂林潘飛声、談話久レ之、○
 十六日、書状ト写真トヲ博多中洲ニ送出ス、○十七日、Koell's
Theaterニ於テ「ミカド」ト称スル觀曲ヲ觀ル、賞スルニ足ルモノ
 ナシ、○十八日、午前俄羅帝亞歷山大氏來ルヲ觀ル、蓋シ独乙帝
 ト善ヲ結ブガ為メナリ、先是独帝維廉与澳帝約撰、逢ニ于
 加斯他印、(逢伊相屈利比于仏里士利比私兒越)而今又会合
 于俄帝于伯林。乃知独俄澳伊之結好始于此也。○十八日、有名
 ナル哲學家フエヒネル氏卒ス、享年八十六、○十九日、Casari's
Panopticonヲ觀ル、夜、斯波淳六郎氏ガ英國ニ往クヲ送ル、「此
 日、仏国ルウイエー氏(Rouvier)ノ内閣破壊シ、人心洶々ナリト云
 フ、○二十日、哲學家チエレル氏ニ招燕セラル、薄暮博士ミレル

氏ヲ訪ヒ、談笑時ヲ移ス、亦一種ノ畸人也、○二十一日、ブレハム侯ニ東洋学校ニ逢フ、「ブエトネル」氏ト共ニZeughausニ至リ、凡百ノ軍器ヲ觀ル、○二十四日、独乙国会開場、○二十六日、藤島了穩氏。書状并ニハルトマン氏ノ耶蘇教自壞論ヲ郵送ス、○二十六日、日本人会ニ至ル、○二十七日、教授ザハウ氏來ル、次テ潘飛声関桂林二氏來訪、晚景共ニ「パノプチクム」ヲ觀、帰途又小酌シテ分ル、○二十八日、潘氏寄ニ一柬一詩來。云。昨承盛筵招飲。酒後又同步灯市再醉。此真樂境。使人忘在羈旅也。復蒙遣車送歸。深情厚誼感激何尽。謹賦詩誌不忘。即希和韻為幸。其詩云。

十月十三日。井上君迪招飲。至夜復同過市樓大醉。以車送余歸。翼日謝以詩。

潘飛声

栢林風雪裏。覓醉訪君居。酒後見奇氣。胸中多古書。登樓應共醉賦。解珮贈當鑪。更遣寒天月。殷勤送我車。

此頃シヨイルレンス氏(Dr. Scheurlens)所謂ル蟹病ト称スル難治病ノ元因(Kressen-Artiles)ヲ発見ス、○二十九日、次韻答潘飛声、其詩云、高標何俊士、避世ト幽居、月白夜揮劍、雨深秋抄書、風流時討景、慷慨又當鑪、才力有誰敵、胸中藏胸五車、潘氏云、車韻尤不易及○三十日、宮崎氏ニ書状并ニ詩ヲ寄ス、潘氏ノ韻ヲ次ス、其詩云、汲々只研學、煙街深处居、看来千古道、讀破万編書、冬逼不重服、夜殘猶擁鑪、浮雲輕富貴、何歎出無車、

此日哲學者ラツソン氏ヲ訪ヒ、哲學ヲ論ズ、

○十二月一日、日本文部大臣ヨリ「官費ヲ以テ留學延期之儀難聞届

尤滿期後私費ヲ以テ滞在シ且其間彼方ノ依囑ニ応ズルハ特別ノ訳ヲ以テ之ヲ許可ス」トノ指令ヲ得、○二日、仏国大頭領葛列威辭職伝檄列洛歪兒統諸上院、符洛克統諸下院、其文云、當内閣壞裂、苦慮計画、無辭戰之心、然昨兩院皆非之、無之守決心辭職、蓋今當讓施政之權、甚欲我邦離危以就安、敵我者不敵國民也、乃茲辭職以告兩院事務員、○三日、普国政府ヨリ独貨二百七十麻克領収ス、「フロレンス氏共ニ會シ、談話久之、」此日法国人ウエルサイユ官殿ニ會シ、Sadi Carnot氏ヲ撰奉シ、以テ大頭領トナス、又セルビヤ國人選欲為總理大臣者六人、ト弥蘭王以「德氏」(Tuzacovics)為總理大臣、以「威氏」(Vukowics)為副總理大臣、○四日、支那人飛声桂林二氏ヲ訪ヒ、筆談久之、此夜ウエベル氏ニ招燕セラル、帰途グルーベ氏ト小酌シテ分ル、○六日、独國々會議長Wedell Piesdorf并ニ国会議員三十人許、我東洋学校ニ來ル、即チ相逢テ談話ス、○七日、Büchner氏ニ就テ踊技ヲ習フコトヲ始ム、「日本文部省ヨリ独貨八百拾麻九十布ヲ領収ス、○十日、日本公使西園寺公望來着、」ランゲ氏ニ招燕セラレ、レーマングロート二氏ト相會ス、「仏国ノ政治家ゾルツル爾斐梨因者ニ射ラレ、創傷ヲ受ク、」此夜競馬ヲ試ミ、衆ニ先ツヲ夢ム、○十一日、高橋茂氏ト共ニ桂林飛声二氏ヲ訪フ、○十二日、埤羅爾(Hirard)氏仏国内閣總理大臣トナル、○十三日、渡辺昇去ル、「端西国ヘルテンスタイン氏ヲ大頭領トシ、ハムメル氏ヲ副頭領トス、○十四日、薩哈先生ニ招燕セラレ、婦人フハイト氏ニ逢フ、」此夜石田千頭二氏來ル、○十七日、千賀氏ニ書状ヲ送

ル、○十九日、婦人セブレル氏ニ招燕セラル、茲ニテ婦人ロエジツケ ユーリ并ニ少女タム諸氏ニ遭遇ス、○二十一日、東洋学校講義畢ハル、此日石田、千頭、一ノ瀬、高橋、大海原諸氏来リテ傍聴ス、藤島了穂氏に書状を送る。○二十八日、公使館ニ招燕セラル、

○戊子明治二十一年一月一日、普国文部省ニ至リ、アルトホフ、ザハウニ氏ニ逢ヒ、以後年ニ三千六百麻克ヲ領収センコトヲ約ス、但シ教授時間ハ一週二十時乃至十八時間トシ、休業ハ一年ニ六週間トス、是レ条約文面ノ事ニテ實際必シモ然ルニアラズ、○此日、ギスチキ一氏ヲ訪ヒ、談話久レ之、○二日、潘飛声寄書云、連日大風雪、嚴寒特甚、故不能与足下相往還、然知足下之懇々於弟也、大集読畢已題詩并妄加評語、其中可伝者極多、今采数首入停雲集矣、海外風雅人不多、弟之得足下一大縁也、雪晴時過我一致為快、并詞大安、

君迪仁兄出示大集奉題二詩
潘飛声
天涯吟侶似晨星、跌宕逢君眼易青、各有行囊戴詩卷、尽模山水過西溪、
秋宵無緒欲尋詩、旅館空階独步遲、此際合吟君好句、寒花狼藉白胡枝、

讀井上君迪詩奉題
関桂林
井君年少人中龍、驚人詩句何豪雄、扶桑三載未相識、欧海今來拜

下風、

此日、桂林飛声二氏ヲ訪フ、夜日本会ニ詣ル、○三日、ハルトマン氏ニ書状ヲ送ル、此日石田千頭二氏去ル、○四日、東洋学校開校、日本公使西園寺来ル、夜姉小路公義氏日本向テ出發セン為メ、離筵ヲ開ク、因テ其席ニ赴ク、一詩アリ、云ク、

東西小国恐不安危、独仏英魯伺隙時、縱令与君通隔海、赤心同願固邦基、

此日普国政府ヨリ百八十麻克領収ス、○八日、福富氏来ル、○十日、姉小路氏出發ス、○十一日、福富氏ト共ニギズチキ一氏ヲ訪フ、「アルキテクテンハウス」ニテプロデー氏ノ演説ヲ聴ク、○二十一日、プリンクマン氏ノ演説ヲ聴ク、○二十二日、シエブレル婦人ニ招燕セラル、夜ザハウ氏ニ招燕セラレ、スプレングルプリンクマン諸氏ニ逢ヒ、帰途プリンクマン氏ト共ニ酒店ニ入り、日本美術ヲ論ズ、○二十三日、福富高橋二氏去ル、○二十六日、人類学の博物館ニ至リ、バスチアン氏ニ面会ス、○二十八日、東洋学校ニ於テ日本神道ノ事ヲ演説ス、來聴スル者、三百余名講堂ニ充滿ス、此夜日本人会ニ至ルス、大医フヒルヒヨウ氏哲學家チエラー氏人種學家バスチアン氏等ノ諸大家来会ス、夜、日本人会ニ至ル、○三十日、博士フレセニウス氏ヲ訪フ、「弥列兒女史詩一篇ヲ贈ル、其文ニ云ク、

漠々寒雲合、長空昼不明、朔風吹雪嘯、冬深柏林城、此時客窓下、遊子氣転清、佳人对我座、嬌容太有情、遠山凝眉黛、芙蓉帶露輕、飛燕或其匹、氷肌欺水晶、笑談夜入興、春意座上盈、

異郷得此友。真貴於玉瓊。世事渾是夢。鑑鉄何復爭。只有心相合。千歲遂難更。北邱堆白骨。一瞬是人生。富貴浮雲似。足云毫末榮。同心有女史。共期只衷誠。暮々世上說。付与風水声。蜻州多山水。可去万里程。墨堤春深处。花間欲酒傾。

此日、日本文部省ヨリ八十六麻克領収ス、

○一二月三日、ガベレンツ氏来ル、○四日、同氏ノ演説ヲ聴ク、○

五日、夜、ザハウ氏ニ招燕セラル、シユラーデル タンクルマン

諸氏亦来会ス、○八日、シレル氏ト共ニVictoria-Theaterニ至ル、

○十日、普国政府ヨリ三百麻克領収ス、○十一日、カツセル氏ヲ

訪フ、○十日、シエプレル氏ヲ訪フ、○十六日、アレント氏ノ

演説ヲ聴ク、○二十一日、八代氏来ル、○二十三日、大和会ニテ

演説ス、○二十八日、Rhys Davids, Buddhismヲ読ス、」此日八

代氏去ル、○二十九日、団琢磨氏ニ逢フ、

○三月一日、海江田有賀二氏出發向日本、○文部大臣ニ届書ヲ送

リテ本年四月以後猶ホ二年間私費ヲ以テ滞在スル旨ヲ報ズ、「妻并

ニ金井久保田二氏ニ書状ヲ送ル、○七日、普国政府ヨリ百五十麻

受取ル、○五日、勃国王コプルガー氏(Prinz Ferdinand der

Koburger)ハ土爾其帝私ニ露帝ノ指圖ニ從ヒ不正統ノ王ナリト称

シ、之ヲ勃国境内ヨリ^{オラシムベキ}■旨ヲ公布セリ、○九日、午前八時半

德国皇帝維廉第一世崩、二十九年間在位云、公太子就位、世称

曰扶利德里希第三世、○十一日、德帝自伊国三黎謨府ニ還、普国

伯爵城一、有疾太漸、○十二日、親故德帝維廉死骸于寶母寺、

儀式太嚴、威容最莊、使觀者不覺起恭敬畏怕之念、○十三日、

Odenberg, Buddha, Sein Leben, Sein Lehre, Sein Gemeindeヲ読

了ス、」東語学校閉ツ、○十六日德帝維廉ノ送葬ヲ見ル、○十七

日、丸山作樂日本ニ向ヒ、出發ス、」此日、■氏ニ謁ス、○十九

日、Wilhelm Müller, Deutsche Geschichteヲ読ス、」坪井野尻

二氏ヲ訪フ、○二十日、普国々々會閉ツ、(昨年十一月二十四日ヨ

開キタル也)、○二十八日、Hartmanns Philosophie des Unbewus-

sten 2Bde.ヲ読了ス、○三十一日、仏国チラール氏ノ内閣(Minis-

tère de M. Jaurd)破壊ス、

第五年期

○四月一日、潘飛声来、○三日、普国政府ヨリ六百麻克受取ル、」

此日、フロケー氏仏国内閣総理大臣トナル、○四日、Openhausニ

行テAidaト称スル觀曲ヲ觀ル、」此日、有感賦ニ七絶一首、以

抒其情云、一朝立志出家郷、唯願青衫上国光、事業無成

身欲老、異邦終幾星霜、○十日、Goethes Got von Berlichingen

ヲ読了ス、○十二日、Goethes Hermann und Dorothea & Schillers

Das Lied von der Glockeヲ読了ス、」此日、スプリンゲル氏ニ招

燕セラル、○十八日、藤島了穩ニ書状ヲ送ル、夜コンコルヂヤニ

於テ亜刺比亞人ベンアリベー氏ノ幻術ヲ觀ル、頗ル奇、○二十日、

Friedrich Wilhelm Staatlich Theatreニ行テ演劇ヲ觀ル、甚々賞ス

ルニ足ラス、○二十三日、東語学校開講、○二十四日、関直彦来

此、上歸途、將代福地源一郎為東京日々新聞記者、○二十

五日、Goethes Egmontヲ読了ス、○二十六日、潘飛声来訪、○二十

十九日、Schillers Maria Stuartヲ読了ス、」小亜細亞人Mausssjian

来訪、「午後、姚文棟子梁、桂林竹君、潘飛声蘭史来訪、筆談良久之、既而共散。于市街、遂入于酒店、傾酒笑談、入夜而還、家、潘氏有詩云、海外難消作客情。春游休放酒杯輕。未垂楊柳聞鶯語。愛傍桃花倚馬行。良夜最互連襟集。狂言無礙隔簾驚。相思不解陳思珮。空負鷓鴣林白伝名。

○五月二日、西勒氏ノ Yungfrau von Orleans ヲ読了ス、○三日、日本文部省ヨリ「本邦教育上ニ裨益アル事項ノ報告ヲ嘱托シ手当トシテ銀貨四百円交付ス」トノ指令ヲ領取ス、○五日、Lette-Yeamニ至ル、○八日、九日、石黒氏ヲ訪フ、○十三日、太活千賀二氏ト共ニ Werdert 卜ムヘル一小邨ニ行テ桜花ヲ觀ル、花白ク紅色ヲ帯ビズ、樹小ニシテ風趣ニ乏ク、路悪ク塵多ク、日東ノ山水ニ及バザルコト遠シ、○十三日、人種的博物館ニ行キ葛祿伯桂秋曹二氏会シ、日本駐在独乙公使 Dr. v. Holleben ニ逢フ、○十五日、日本文部省ヨリ銀貨四百円即チ独貨千二百二十麻克領取ス、○十八日 James L. Boves (11 Dale Str. Liverpool) ニ書状ヲ送ル此日地理■ノ講義ヲ畢ハル○十九日、渡部昇氏ト共ニ Museum der Völkerkunde ニ至リ又 Kunst-Gewerbe-Museum ニ至リ館長ツツシング氏ニ逢フ、○二十二日 Paukow ト云ヘル一邨ニ至ル○二十三日、ライプチヒ府翻譯書院ニ書状ヲ送ル、○二十四日、井上円了并ニ駆通通信上局ニ書状ヲ送ル、○二十五日、納税局ニ書状ヲ送ル、○二十八日、井上円了ステフハニ、モナステリオス、フヒツチヒ諸氏ニ書状を送る、○三十一日、井上円了に書状を送る、「此夜与桂林潘飛声俱往列華符曼氏七十賀筵、来会者数千人、唱歌

音楽共使人爽快、

○六月一日、朝比奈知泉氏に書状を送る其七絶一首を載す、云く、南蛮缺舌暗妖氛、大日本魂無復聞、咄々何人徒慕彼、蓋教碧眼学吾文、○二日、文部大臣森有札并に久保田讓氏に書状を送る、○三日、仏書四部藤島氏より受取る、「北京の承厚并に陳其鏞滬上の姚文棟三氏来訪す、姚氏披閱東洋哲学史云、重洋万里閉戸著書、此是奇境、拳世方波靡於西学、而君表章東哲、隱然有砥柱中流之意、亦可謂奇士、」此日、日本宗教史を編纂するの志を起す、○五日、藤島氏并に通信上局に書状を送る、「Die Expedition der Vossische Zeitungより論史料として八十九麻四十布領取す、」此日、博多川端に書状を送る、「此夜、身体の量をハかるに百二ポンドあり、○六日、博多中洲の父并に妻に書状を送る、○九日、書状并に伯靈城の写真を甘木に送る、「午後ハルトマン氏を訪ひ哲学上の事を談話す、○十日、姚文棟陶渠林二氏来訪筆談移時、○十二時日、日本公使館に五百馬を償却す、是れ留学資金の重複せるもの也、○十三日、以端午前一日、支那欽差館開酒筵招燕、座有姚文棟、陳其鏞、陶渠林、承厚、張德彝等十有余人、談笑移時而還、汪鳳藻出示其詠牡丹詩云、数叢香艶醉流霞、信是人間第一花、晚筵自成真富貴、濃裝偏異俗繁華、儻裁宮禁原傾國、便置山林也大家、四月海天饒勝賞、故園韻事漫相誇、○十五日、当端午、潘閔二氏有詩如左、

端午日食「桜桃」、同「桂林君作

飛声

海国朱椽乍熟時、碧叢香酪滴「瑠璃」、尊前忽動專鱸興、君憶「鶯梨、我荔支、

和潘蘭史韻

桂林

佳果初嘗五月時、鶯黃酒瀉碧瑠璃、与君醉行他年約、珠海評花啖荔支、

○十五日、德国帝扶荔篤列第三世崩、時年五十七、子維廉第一世即位。「此日贈

書于藤島了穩」、○二十日、萊布湊城讎訳書院ニ書状ヲ送ル、○二十一日、シエペレル婦人ニ書状ヲ送ル、○二十七日Lette-Hauseニ往ク、「此日途上觀「維廉帝及皇后」、○二十九日、Schopenhauer's Die Welt als Will und Vorstellungヲ読了ス、「浜尾新ニ書状ヲ送ル、○三十日、Grünavealdニル、山水風光甚佳ナリ、夜、大和会ニ至ル、来会者約四十人、

○七月一日、姚文棟來訪、「此頃禹山潘光瀛寄詩二首來、其一云、東国声詩列「講筵」、春風桃李私吟箋、不「函唐土搜名勝」、又見弓衣織錦篇、其二云、江戸才名播「夜郎」、吟成釵氣化「珠光」、知余編就桐君錄、青鳥書伝代「勸觴」、（外）昔古人工「詩伝」於蛮方、蛮人皆綉其詩於弓衣之上弓衣弓袋也、「（外）夜郎」李白之詩名播於夜郎、夜郎乃古時極遠之國、因此「栢林」、（外）「青鳥」昔漢武帝見「西王母」、先命「青鳥」寄一檄、○二日「Jhering, Kampf und Recht」ヲ読了ス、○三日、普国政府ヨリ六百麻克受取ル、○四日、人類博物館ヨリ百五十麻克受取ル、○五日、博多川端并二千

賀氏ニ書状ヲ送ル」应当氏來訪ス、六日、柳沢上田二氏ニ書状ヲ

（尺牘之）

送ル、○七日、東洋学校学生ト共ニGrünavealdニ至ル、○八日、関藩二氏ト共ニWilmersdorfニ至ル、途上張闔二氏ニ逢フ、○十一日、姚、陶、承三氏ヲ訪フ、○十四日、ハルトマン氏ニ小冊子二部返送ス、「此日博多中洲ニ伯林ノ図ヲ送ル、○十五日、Linderhofanニ招燕セラル、茲ニテユスター氏ニ逢フ、○二十日、薩哈先生ニ書状ヲ贈テ其誕生日ヲ賀ス、「此日、德帝維廉第一世往入ニ彼土爾堡城、与「露帝亞歷山第三世相逢、蓋欲「結兩國之交也、○二十二日、姚子梁陶渠林潘飛声三氏來訪、乃与俱散「策市街、晚至「繪画陳列場、(Kunst-Ausstellung)、○二十五日、Königlich Bibliothekニ入テ和漢書籍ヲ見ル、○二十六日、Lotze's Mikrokosmos Bd. Iヲ読了ス、「此日、德帝至「瑞典斯特克和爾謨城、与「阿斯加第二世「締交、以厚「兩國之好、」此日、坪井野尻諸氏來「我東洋学校、傍「聽我講義、」○三十日、東洋学校休講、

○八月一日、德帝維廉第二世訪「宰相比斯麻克于「フリートレスルイ、蒔城、」○二日、午前七時四十五分、發「栢林城、」經「格倫城、」觀「ドム、寺塔、」○三日午前五時、到「白耳義国貌留撰児府、」觀「万国博覽会、(L'exposition internationale) 繪画陳列場 (Musées royaux) 并博物館 (Muséum d'histoire naturelle) ○四日「Muséum de l'Antiquité, Palais des Académies, Palais de la Nation等ヲ觀ル、」此日「齋藤修一郎ニ客舎ニ逢フ、○五日午前七時四十六分頃貌留撰児府ヲ出發シ、午後五時英國倫敦府ニ到着スシ、Bedford Place 3ニ投宿

ス、○六日、午前British Museumニ行き、ベンドール ドウグラ
ス リード諸氏ト相会シ、東洋諸物ヲ品評ス、午後South Kensington Museumヲ觀ル、○七日、National Gallery, Westminster Abbeyニ至リ、午後黒田公ヲ訪フ、夜高橋達來ル、○八日、Royal Courts of Justice, London Bridge, British Museum, Somerset Houseヲ觀ル、○九日、the Italian Exhibitionヲ觀ル、十日、ケンブリッヂ府ニ往キ、各校ヲ巡視シ、稲垣滿次郎ニ逢フ、○十一日、オクスフォード府ニ往キ、學校ノ景況ヲ觀、帰途原語學者マクス、ミラー氏ニ会合シ、仏教南北派ノ事ヲ論シテ還ル、○十二日、井上四了ヲ訪ヒ、仏教ノ事ヲ論ズ、夜、高橋達訪來、○十三日、石田議官ヲ訪フ、○十四日、スペインセル氏ヲドーリング村ニ訪フ、是ヨリ以前兼テスペインセル氏ハ病氣ニテ人ト面晤スルコトヲ好マズ常ニ市外隱居ノ地ニ閑居セルコトヲ聞キ及ベルヲ以テ遭逢スルノ念ハ殆ド絶チタレトモ尚ホ實際果シテ然ルヤ否ヤヲ知ラバヤト思ヒ、マクス、ミラー氏ニ会合セシトキスペインセル氏ノ住所ヲ問ヒタルニ氏答テスペインセル氏ハ多分南方海岸ノブライントン府ニアルナラント言ヘル而已ニテ事實確定セザリキ、然レトモ又思フニ、スペインセル氏ノ書籍ヲ出版スル倫敦ノ書肆ニ問合セナバ氏ノ住所判然スルコトナラント、乃チ該書肆ノ番當ニ尋ネタルニ、番當答ヘテスペインセル氏書籍上ノ事ハ、倫敦ニアル氏ノ住所ニ報知スルコトナリ因テ其番地ニ至リ問ヒ合セタルニ、汚穢ナル衣ヲ纏ヒタル一書生出テ來リテスペインセル氏ハ現今ドーリング村ニアリト、是ニ於テ細ニ其番地等ヲ聞取り、翌日午後汽車ニ駕シテ該村

ニ至ル、該村ハ倫敦ヲ距ル一時半許ニシテ東北ハ山ニ倚リ、西南ハ曠野ニ對シ、曠野極マル処、又山アリ、其間絶テ水流ヲ見ズト雖モ、綠樹參差トシテ堊花之ヲ弥縫シ、夕陽西ニ傾ク比ニ炊烟ノ外ニ塔尖ヲ照シ出ス杯頗ル間雅ナル風景ナリ、余村ニ入りテ処々スペインセル氏ノ住所ヲ搜索スル時ニ忽チ後ヨリ馬車ヲ驅リテ來ル者。アリ、共ニ顧テ余ヲ凝視ス、殊ニ其一人。偉丈夫ニシテ兩頰ニ鬚アリ頭ニハ広帽ノ如キ奇帽ヲ載キ、其相貌自ラ尋凡ナラズ、写真ニテ見タルスペインセル氏ト符節ヲ合スルガ如シ、因テ窃ニ其偉丈夫ハスペインセル氏ニシテ他ノ一人ハ氏ノ書記タルコトヲ推察セリ、是ヨリ氏ノ住所ニ就テ問合セケルニ容治タル一個ノ美人出テ來リテ曰ク、スペインセル氏ハ、（筆記と共に）今車ヲ驅テ山麓ノ間ニ行ケリ、大約半時間ニシテ歸リ來ラント、乃チ名刺ヲ投ジ置キ半時間ヲ経テ再ヒ訪ヒタルニ、スペインセル氏已ニ歸リ來リテ内ニ在リ、其家ノ主人アレン氏并ニ其婦人先ツ余ヲ迎フ、クロツド氏亦其席ニアリ、此二氏ハ皆著述家ニシテ専ラ進化論ヲ主張スル者ナリ、暫ク茶ヲ喫シテ此二氏ト共ニ談話シ、後子独リススペインセル氏ノ室ニ入りテ氏ト談話ス、氏ノ室ハ巨大ニシテ一篇■書ヲ置カズ、長キ椅子ノ上ニ倚レリ、其狀リボー氏ガ會テ余ニ告ゲタル様ト符合セリ、余始メ氏ノ哲学ニ就キ、三条ノ疑点ヲ拳ゲ逐一之ヲ論セント思ヒ居リシカド、氏ノ老病力ナクシテ議論ニ堪ヘガタキコトヲ察知シセシヲ以テ哲理上ノ爭論ハ一切之ヲ避ケタリ、然レトモ亦哲學者ニ関スルコトモ多カリキ其要點略々左ノ如シ、
余曰ク、僕ハ君ノ壯強ニシテ総合哲学ヲ完了センコトヲ切望ス

ルモノナリ、氏曰ク、僕ハ^{今年}六十八歳ニシテ、最早老ヒタリ、腦力全ク疲羸セリ、逆モ該書ヲ完了スルコト能ハズ、

余曰ク、然レトモ君已ニ肝要ナル部分ハ完了セルニアラズヤ、氏曰ク、倫理学最モ肝要ナリ、然ルニ之ヲ完了スルコト能ハザルハ甚ダ遺憾ナリ、

余曰ク、君現ニ自己ノ伝ヲ著ハサル、由聞キ及ベリ果シテ然ルヤ否ヤ、

氏曰ク、然リ、然レトモ是レ亦完了シ得ルヤ否ヤヲ知ラズ、

余曰ク、僕而久シク独仏兩國ニアリテ之ヲ察スルニ、君ノ哲学書広ク伝播セリ、殊ニ仏國ニハ君ノ哲学ヲ崇敬スルモノ尠シトセズ、

君曰ク、最モ怪ムベキハ德國人ノ余ノ哲学ニ対シテ甚ダ冷淡ナルコトナリ、(It is most curious that the German People have no Sympathy with me)

余曰ク、然レトモ君ノ哲学今日始メテ德國ニ影響ヲ及ボスノ兆ヲ露ハセリ、即チミセレト氏ガ^{近頃}柏林学士会院ニテ君ノ哲学ニ就キ演説センガ如キ其一証ナリ、又ウントハルトマンヘツケル諸氏皆君ノ哲学ヲ称揚スルコト僕ノ自ラ耳ニスル所ナリ、唯々ターノー、フヒツセル氏ノ如キハ君ノ哲学ヲ採ラズ、曾テ僕ニ謂テ曰ク、スペインセル氏ノ哲学ハ哲学ト名ツクベキ者ニアラズ、

氏之ヲ聞テ彼レ我ニ反スルモノカト言ヒテ、哄然一笑セリ、

余曰ク、君ノ哲学書類頗ル日本ニモ伝播シ、已ニ日本語ニ翻譯セルモノアリ、

氏曰ク、日本ニテハ耶蘇教ヲ引キ入ル、ヨリハ唯理論ヲシヨナリズスヲ振起スルニ如カズ、然カスルニハ僕ノ哲学関係多シ、

余曰ク、然リ、僕モ亦然ク思フ、

余話柄ヲ転ジテ曰ク、君曾テ叙述社会学ヲ編輯シ始メラレシガ未ダ完了セザルニヤ、

氏曰ク、未ダ完了セズ、又已ニ之ヲ完了スルノ念ヲ絶テリ、

余曰ク、僕ノ此事ヲ問ヒシ所以ハ若シ君猶ホ該書ヲ完了セントナラバ東亜ノ部分ハ頗ル助力セント欲スルナリ、

氏曰ク、該書ハ僕自ラ之ヲ編輯スルノ念ヲ絶チタレトモ、僕死後ノ遺産金ヲ以テ之ニ充テ他ノ学者ヲシテ之ヲ編輯スセシムルノ意ニテ現ニ宣教使ウエルネル氏ハ支那ノ部分ヲ担任セリ、君若シ日本人ヲ懲懲シテ日本部分ヲ担任セシメバ大幸ナリ、

余曰ク、是レ亦出来ガタキコトニアラズ云々、

此日談話ノ間、スペインセル氏ハ快活ニシテ毫モ老衰ノ状ヲ見ザリキ、立去ルトキニ臨テ氏自ラ戸外ニ出テ来リ、本日ハ誠ニ愉快ナリキ、ト言ヒテ、余ノ帽子ト傘トヲ取り余ニ与ヘタリ、スペインセル氏ハ^{曾テ前報セシトクモ現に}榮独ノ身ニテ、^{其天能開立立の入信今}一個ノ親戚ヲモ有セズ、暫ク友人アレ

氏ノ家ニ寄寓シ、優遊自適。一切読書ヲ廢セリ、個自己ノ伝ヲ著ハス為メ、時々書記ヲシテ筆記セシムル而已、○十六日、India-Museum, The Museum of natural historyヲ觀、午後井上田了ヲ訪テ、學術ヲ論ズ、夜、石田議員ヲ訪フ、○十七日、井上田了ト

共ニBritish Museum, South Kensington Museum & India Museumニ往テ佛像ヲ鑑定ス」此日、石田議員日本ニ還ル。○十八日、ホフ黒田高橋三氏ヲ訪ヒ、再ニNational Galleryニ至ル。○十九日、Kew Gardens & Richmondニ至リ、途次土方氏ヲ訪フ、不遇。○二十日、土方寧來訪ス、即チ共ニ往テ、Tussaud's Wax-Workヲ覽ル。○二十一日、the Tower, the Bethnal Green Museumヲ覽、夜ニ入りテLycium Theaterヲ觀ル。○二十二日、Crystal Palaceニ入りテ逍遙シ、薄暮家ニ還ル。○二十三日、Soane Museum, Anglo-Danish Exhibitionヲ觀ル、(Exhibition)此日支那欽差館ニ往テ鳳梨ヲ訪フ、不在、乃チ參贊潘志俊字子静ニ逢フ。○二十四日、National Gallery & Buckingham Palaceヲ觀、夜ホフ氏ト大ニ哲学ヲ論ズ。○二十五日、黒田高橋二氏ト共ニ倫敦府ヲ發ス、時ニ午前九時四十分ナリ、午後六時巴里府ニ着ス。

臨去戲賦七絶一首

又々 飛脚 深谷旅館十丈樓
炊煙如墨霧斜々。櫛比鱗次百万家。
鄒叟有聞應發怒。此間皆是貪錢人。

○二十六日、Musée de Clunyヲ觀、帰途藤島了穩ヲ訪フ、夜、l'Eden-théâtre et le Jardin de Parisヲ觀ル。○二十七日、Palais de Versailles et le théâtre françaisヲ觀ル。○二十八日、Musée du Luxembourg et le Palais de Justiceヲ觀ル。○二十九日、le Panthéon et l'exposition de Sauvage et Hygièneヲ觀ル。○夜九時二十五分、發「巴里城」、○三十日午前八時五十分、到「瑞西國

日涅華府、風景雖佳、市街荒涼、觀「展画場及大學博物館等」。少ニ足、賞者、○三十一日、午前十一時、發「日涅華府」、上「船渡」列曼湖、風日清涼、仰觀「遠嶂」、抵「羅參府」、倩「車巡」覽市街、無「足」觀者、然後駕「汽車」、赴「栢嶮府」、薄暮投「宿」。

○九月一日、發「栢嶮府」、赴「留撰倫府」、此間渡「湖」二回、奇峯屏立、雲奔雪飛、風光最佳」。○二日、發「留撰倫府」、抵「志里克府」、仰觀「比刺篤山」、乱巖突兀、有「千古雪」、○三日午前十時五分、發「志里克府」、午後哺時頃、抵「德國岷彭府」、○四日、觀「新」旧展画場、及「繪画博覽會」等、夜觀「演劇」、題曰「飛英」、係「和克」涅爾氏作、真美觀也。○五日、觀「博物館并勸業博覽會」、大「有」所「益」、○六日、朝觀「庶克氏展画場并機器博覽會」、午後一時四十五分發「岷頭府」、十時頃、入「維納府」、○七時、午前觀「博物館」、名曰「栢爾飛的」、間有「足」觀者、午後訪「戶田欽差大臣」、○八日、觀「勸業博覽會」、○九日、与「戶田欽差大臣」棚橋參贊「狩」西比嶮、有「所」獲、○十日、巡「覽市街」、○十一日、遊「于」ラフセンブルク、國池社館夜觀「線藐倫邸」、夜觀「演劇」、即「靜曲」也、題曰「法西篤」、自「歌」的作「脱化來」、艷麗婉曲、足「以」樂「耳目」、唯「未」及「原作」也、○十二日、朝、八時十分、發「維納府」、午後七時頃、抵「德列士天府」、此日途上与「伊國人羅西氏」談話、○十三日、觀「展画場」、夜觀「演劇」、係「法人藤克利伯氏」作、以「唱歌」為主、板而不盪、絕無「倏忽變幻之妙」也。○十四日、午前十時四十五分、發「德列士天府」、午後一時四十五分還「伯林城」、○十五日、東洋學校ニ出頭シ、夜、「サルダナバル」ト題セル踊舞曲ヲ觀

ル、「此日、渡辺昇出発向日本、」○十六日、ポツツダム府ニ至リ、宮殿園池ヲ観ル、「潘飛声訪来リテ遇ハズ、即チ留ニ一詩ニ云、幾回樽酒話風塵、更喜移家住緑雲、半卷新詩容我和、一樓明月。与君分、司煎好夢忘同統、処士閒情可共聞、便擬招邀泛蘭棹、列河秋水正沄々、○十七日、巴里府ノ書肆マレスク氏ニ書状ヲ送ル、○十八日、黒田長成高橋達二氏白耳義ニ赴ク、将ニ倫敦府ヲ経テ日本ニ還ラントスル也、「此日、身体ノ量ヲハカルニ百六磅アリ、本年六月ニ比スレバ四磅ヲ増加セリ、○二十四日、ダルウイン氏Origin of Species第一巻ヲ読了ス、「潘飛声示詩如左、

度 戊子中秋夜著力宮賞月

潘蘭史

玉宇雲低翠作堆、栢林秋色压城隈、楼台百尺灯齐上、箏笛千声月欲来、要覓酒狂飛騎至、時君袖以事不至、恰題詩就報花開、席上列異花數盆、乘風忽動家山感、安得仙槎駕海回、

奢力宮觴月、即席次蘭史韻

桂竹君

現華風急雪濤堆、去歲連吟記海隈、去秋在伊太利現華望月、瞥眼浮雲纔一過、当月頭明月又重来、心旌此處應先動、時有美人離外招選、離緒今宵且暫開、屈指團欒經再度、布帆無恙共君回、

二十五日、朝比奈知泉黒田長成二氏ニ書状ヲ送ル、黒田長成氏ハ本月二十八日ヲ以テ英国ヲ出発シ、日本ニ還ラントスルガ故七絶一首ヲ贈ル、云ク、遊子揚々意氣生、駕船今日向東瀛、寄言學海本無際、要惜寸陰成大成、「此日、野尻氏来訪、○二十

六日、高橋達氏ニ書状ヲ送り、併せて七絶一首ヲ寄ス、云ク、模獨擬英人世喧、神州無復大和魂、欽君業就返郷里、欲策治安木匠弊原、一夜千賀氏ニ書状ヲ送ル、○二十七日、内田周平氏ニ書状ヲ送ル、○二十八日、和田維四郎飯盛挺造南条文雄三氏書状ヲ送ル、南条氏ニハ又七絶一首ヲ寄ス、云ク、幾歲遊英夙夜勤、方声今日四陲聞、誰知咎語本難解、空海以来唯有君、「陶集林来訪、不遇、乃留題云、別後苦相憶、聞駕至自英、法遊艸定添幾許、厚矣、走候不晤悵也、奚如拍照送上、乞晒取、此請旅安、拍照者上海之語、即謂写真、北京謂之照相、廣東謂之印相、渠林又題巽軒詩鈔、云、東瀛才子井上哲、詩筆依稀中晚唐、著者傳世文章闢邪教、兼感兼人才調噪重洋、相逢海外琴樽古、坐愛花陰風雨涼、我欲乘槎泛牛斗、招邀仙侶話滄桑、○二十九日、寺田弘氏ニ書状を送る、「此夜大日本会に出づ、○三十日、川端中洲両処ニ書状ニ書状を送る、

○十月一日、甘木富田春山に書状を送る、「此日絵面共進会に至り、帰途羅馬梵燒図の「パノラマ」を觀る、○二日、中洲に繪本一卷朝比奈知泉に德國歴史一卷を送る、○三日、姚文棟廣許二氏ヲ訪フ、○四日、Rossini Joesca, Müller V. der Werra, Frau Sche-Peler三氏ヲ訪フ、○五日、Prof. Güzuckinヲ訪フテ暫ク談話ス、○六日、チエラー氏ヲ訪ヒ、種々哲学書ニ就テ問答ス、氏云ク、プラトン氏全書ハSchanz, Hermann二氏ノ出版ヲ善トシ、アリストートル氏ノ書ハゲルハールト氏ノ出版ヲ善シトシ希臘古代ノ殘篇ハムラツク氏ノ出版ヲ善シトス近々チール氏亦之ヲ出版セントス、

○七日、姚文棟与貝蔭泰^如来訪、此日Fraulein Müllerニ招燕セラル、○八日、婦人Margarethe Withoft氏ニ就キ毎週一時間宛伊語ヲ学修スルコトヲ約シ、此日ヨリ之ヲ始ム、○九日、森文部大臣ニ報告書ヲ送ル、○十日、^二法国アレスク氏ヨリ書籍一箱ヲ受取ル、○十日、^三アレスク氏ニ百三十二フラン二十五サンチームヲ送ル、○十四日、Darwin, Origin of Species, 2 vols. ヲ読了ス、○二十日、倫敦ノスタンフアルド氏巴里ノマレスク氏并ニ千賀鶴太郎井上円了両氏ニ通信ス、○二十二日、東洋学校開講、前年ヨリ引續テ学修スルモノPlaut, Franz, Gamatsky, Alpheis, Dohert, Maunchen, Faltin, Michelハアリ、新ニ入校セシモノハOht, Wulff, Krumnsieg, Behrendt, Humbertノ五名ナリ、後又Bodenheimer, Kautzor Jaffe, Ackermann, Thiel, Prost^五名入校シ、都合十名トナル、○二十七日、Darwin's Descent of Man第一巻ヲ讀ム、

○十一月三日、天長節ニ当ルヲ以テ在柏林日本人皆公使館ニ集ル、此席ニ於テ演説ス、○四日、題「瀋蘭史万里乗槎図」、云、五羊才子乗槎客、得意長風送遠游、劍氣私来重海日、詩声吟過萬山秋、定知草稿関經濟、飄喜萍蹤共唱酬、何日招邀泛牛斗、櫻花紅処是瀛洲、又題「蘭史珠江顧曲図」、云、黄河詞調世争伝、自別珠江又兩年、忽向昼窓尋旧夢、天涯誰識杜樊川、其二云、蛮簾能唱浪淘沙、合写羈愁付琵琶、一樣傷春感零落、為君重訴二橋花、○十日、此日ヨリ月給三百麻克トナル、以前月

給百五^十麻克ト給費百五十麻克即チ合セテ三百麻克ナリキ、是レ名目ノ改革ノミ、○十一日、桂藩二氏ヲ酒店ニ招燕ス、○十三日、スタンフアルド氏ニ書状ヲ送ル、○十五日、帝室文庫ニアル日本書籍ノ書目ヲ作ルコトヲ始ム、○十七日、ザハウ氏ニ招燕セラル、○十八日、多湖実氏ニ書状ヲ送ル、○十九日、丸山作樂氏ニ書状ヲ送ル、○二十三日、グーウイン氏ノ著書十二巻受取ル、

○十二月一日、アレント氏ノ演説ヲ聴ク、此夜、東洋学校生徒ト共ニ集会、麦酒ヲ飲ム、○四日、セペレル婦人ニ招燕セラル、タム氏ニ逢フ、○六日、普政府ヨリ百五十馬領取ス、^自夜、東洋学会ニ出ヅ、○七日、ウオルフソン氏ニ招燕セラル、然レトモ行ク能ハズ、○十四日、岡本氏来訪、○十五日、ミラー女史、并ニ金井田中二氏ヲ訪フ、○十七日、井上円了氏ニ書状ヲ送ル、○十九日、セペレル婦人ニ招燕セラル、蓋シ婦人ノ生日ニ当ルナリ、○二十四日、ハルトマン ミラー セペラー プーギシ アイテル クルーゼ諸氏ニ品物ヲ贈ル、^二此日、菊川氏ヲ訪ヒ、飲食談話ス、○二十八日、スタンフアルド氏ニ書状ヲ送ル、

○己丑明治二十二年一月、桂藩二氏来訪、「ランゲ薩哈ギズチキ」諸氏ヲ訪フ、^一夜、ウイクトリヤ劇場ニテAli Babaヲ見ル、○三日、東洋学校開講、○五日、ハルトマン氏ヲ^訪、○七日、人類の博物館ニ於テ印度ノ部分ヲ見ル、○十日、セペレル氏ヲ訪フ、○二十日、女大学及ビ歴世女装考ノ二書ヲ日本ヨリ領取ス、○二十五日、ミレル女史ニ招邀セラル、○廿六日、家兄并ニ中邨徳山

ノ書ヲ得タリ、徳山一詩ヲ寄セ来ル、云ク、

井上君哲君為レ余製ニ寿碑文、辞藻温麗、賛揚過レ情、殆不レ勝ニ
榮荷、輒綴ニ巴調、成ニ長句、

中村徳山

園竹風定足ニ秋眠、誰哉驚レ夢到ニ窓前、且言書簡遠方来、遽々披
見喜欣然、此是即我忘年友、曾尋句讀対ニ書篇、幼而穎悟聰敏
慧、多少俊髦能無レ先、鑑潭螢火城山雪、会映紗窓芸几辺、春朝秋
夜窺ニ典籍、眼透ニ紙背、電光穿、阻勉清苦自固有、不レ須師父煩ニ
陶甄、璞玉渾金知レ器難、鳳雛竜駒見ニ才全、長游ニ碭陽一試ニ普
通、遂入ニ大学ニ冠ニ講筵、家在ニ袖巷ニ呼ニ名哲、其姓井上年壯
年、近賜ニ官資ニ航ニ歐洲、今在ニ徳之伯靈ニ留、此際徒弟哀ニ我病、
却當ニ寿碑ニ要ニ軫憂、至ニ是誌言銘將ニ誰委、遙望ニ鵬程ニ馳ニ書
郵、哲君笑領呵ニ椽筆、口吐ニ采鳳ニ瓊章投、晚窓展読頻感賞、好
辭絶妙向レ何求、衰朽病夫豈容レ吻、清人有ニ評比ニ柳欧、明晰古勁
又簡潔、嘆唱堪レ医蝦蟹愁、独愧語中多ニ慙徳、溢美難ニ当猶擬、
讐、疎愚何以解レ謝レ之、無詞薄腆敢許不、嗚呼浩洋万里水土異、
自玉愛ニ宝回ニ鷁舟、我亦雖ニ老護ニ余喘、寧辱錦繡無ニ珍羞、帰
朝君乘ニ青雲ニ処、芳醇蘸甲炙ニ海鱸、

此夜ハルトマン氏ニ招燕セラル、○三十日、澳国皇太子ルドルフ
氏死、

○二月六日、Architektenhausノ講堂ニ於テ日本婦人ノ事ヲ演説ス、
来聴人、大約三百五十人ナリ、○十日、シエペレル婦人ニ招燕セラ
ル、○十一日、日本憲法ヲ發布ス、此日、刺客森文部大臣ヲ刺

ス、大臣其翌日ヲ以テ逝去ス、○十六日、東洋語学校長ニ願書ヲ
送ル、○十七日、ラーゲルストローム婦人ニ書状ヲ送ル、此日、
原、田辺諸氏来訪ス、夜、身体ノ量ヲハカルニ百九磅アリ、○二
十四日、大和会ヲ退社ス、夜、「ライヒスハレ」ト云ヘル戯場ニ
至ル、

○三月十三日、朝比奈氏ニ一書ヲ送ル、○十五日、文部省ヨリ第八
回万国東洋学会ニ日本政府ノ代理トシテ参会スベキ依頼ヲ受ク、
因テ即日承諾状ヲ送ル、○十八日、シエペラー婦人ニ招燕セラル、
○二十一日、縫子ニ書状送ル、○二十四日、法学家クナリスト氏
ヲ訪テ談話ス、○二十七日、「コンチエルトハウス」ニ行テ、婦人
アイテル氏ノ唱歌ヲ聴ク、○二十八日、モーリッツ氏来ル、此
日「The international Journal of Ethics」ニツタルバイ発刊委員トナルコトヲ約
ス、○二十九日、井上円了氏ヲ訪テ談話久シ之、○三十日、王庫日
本書ノ取調ヲ完了ス、夜、大和会ニ至テ答弁ス、三好退蔵氏ニ
逢フ、

第六年期

○四月一日、林定浩ニ招燕セラル、○一日、Schauspielhausニ至リ、
「ワツフエン、シユミット」ト云ヘル観曲ヲ観ル、可モナシ、不可
モナシ、○三日、坪井岡本諸氏来訪、○四日、柏林客次題ニ蘭史桜
花図冊、其二云、柏林城与唱ニ花游、我別ニ桜花ニ又六秋、忽向ニ
画図ニ感ニ春色、東風吹レ夢過ニ瀛洲、其二云、楼台如ニ画簇ニ桜
雪、墨水芳原一例春、独有ニ娉婷親手植、万枝香影待ニ詩人、○
七日、田中東条両氏来訪、即ち東条氏ニ一書ヲ托シテ、在柏林日

本人ニ示サシム、其文ニ云ク

学者之本文は專真理を明にするに有之候故今迄真理を以て第一之ものと致来候ニ付愛國之情と撞着候事も有之候我邦之為に不相成候事有之と相認候間今日より以前之方向を一変し、将来力所及愛國心を第一とし、力所及我邦之光輝を發揚する様に可致候間無論二月六日之演説の如く國辱に相關するものと被認候言論は向後決して可無之事保証仕候

明治二十二年四月七日

井上哲次郎

後來機會を得次二月六日之演説中國辱に相關する事と被認候簡条は之を当地公衆に對し、之を挽回し得様に相務可申候今日より本文之通方向を變更致し候儀に付是より以前一個人に對し或ハ大和會に於て演説致候事柄之中文に抵触致し候簡条は無効のものに御座候、

此書面は今回生が歐洲在留中而已有効之ものに有之候

九日、日本文部省ヨリ二百円領収ス、○十一日、Spencer's Study of Sociologyヲ読了ス、○十三日、ミラー女史ノ招状ヲ受ク、然レトモ之ヲ謝断シ、藤島円了二氏ト相會シ、日本仏教ノ事ニ就テ相談スル所アリ、○十四日、山根三好二氏ヲ訪テ談話ス、○十六日、藤島円了二氏ト共ニキズチキーハルトマン二氏ヲ訪フ、○十七日、Bopp, Über die Verwandtschaft der malayisch-polynesischen Sprachen mit den indisch-europäischenヲ読了ス、○二十四日、藤島円了桂林潘飛声四氏ト酒肆ニ相會シテ談話ス、○二十五日、

井上哲次郎日記

Giuyeki, Moralphilosophieヲ読了ス、

○五月二日、井上円了藤島了穩出發巴里ニ赴ク、將ニ日本ニ還ラントスル也、○此頃、潘飛声ニ七絶一首ヲ書シテ贈ル、云、征衣纔解、余新游 征塵、忽聽詩声出、英法備 白雲、碧海秋瓦千盞醉、唐白居易与元稹詩 綠楊春待兩家分、有綠楊互作兩家春之句 陳元交誼同、明季中國陳先元交誼 文重、何日珠江訪松雪、至日本、与僧元政唱和 相將携、合刻詩、日元々唱和集 棹下浚沅、遊吳東、歷史約他日同 Wundt, Essaysヲ読了ス、○十三日、体量百八磅あり、○十五日、黒田長成中村徳山二氏に書状を送る、○十九日、「オベルンハウス」に於て「Trompeter of Säckingen」を觀る、○二十一日、伊國王温伯爾士与其子來柏林城、○二十三日、普國政府より四百五十馬克を領収す、○二十四日、文部大臣榎本氏并に中洲に書状送る、此日、明年八月を以て日本に還ることに決定す、伊國の王を觀る、○三十一日、Büchner, Kraft und Stoffを讀了す、

○七月三日、シエヒター氏始めて来る、○九日、太田稻造來訪、Hackel, Natürliche Schöpfungsgeschichteを讀了す、○十四日、時事新報社に書状を送る、○二十七日、ランドベルヒ氏に書状を送る、○二十八日、夜夢にスピノザ ライブニツツ二氏を觀る、○二十九日、内地雜居論を著ハシ、井上円了氏に送る、

○七月二日、普國政府より六百馬克ヲ領収ス、此此日、外山正一、渡部洪基、寺田弘、井上円了四氏ニ書状ヲ送ル、○三日、富田春山朝比奈知泉二氏ニ書状ヲ送ル、○四日、川端ニ一書ヲ送ル、○

七日、ステューグリッツ村ニ遊ブ、○九日、神道論一篇ヲマイエル氏字典ニ送ル、○十三日、Paul Janet, la Crise philosophiqueヲ読了ス、○二十日、和独会ノ大会ニ招燕セラル、○二十一日、ハルトマン氏ニ招燕セラル、教授フフライドレル氏ニ遭遇ス、○二十五日、三好退蔵ト共ニ東洋学会ニ出ツルコトヲ約ス、○二十六日 Dr. Wirth 来訪ス、○二十七日、井上円丁小柳津要人ニ氏ニ書ヲ送ル、○二十九日、東洋学会幹事并ニ金井延ニ書状ヲ送ル、

○八月一日、万国東洋学会々員たる証票を領収す、此日、三好退蔵氏を訪ふ、○二日、末延道成氏来訪す、○三日、藤田茂吉、末延道成、莊田某三氏を訪ふ、○四日、藤田氏来す、会々不在_レ家、故不_レ遇、○二十一日、比公に書状を寄す、○二十三日、モール氏比公の使者として来る、○二十五日、午前八時半、伯林を出発し、午後一時二十五分ハンブルヒ府に到着す、Din Kunstshalle并に市街之景況を觀る、○二十六日、動物植物二園博覽會博物館等を歴觀す、博士プリンクマン氏に遭遇す、「此夜十時二十九分、ハンブルヒ府を出発し、キール府を経てコペンハーゲン府に赴く、○二十七日、午前十時丁抹克國の都府コペンハーゲン府に着す、此日市街の景況を觀、又Tivoliに入る、○二十八日、トルワルドソン氏博物館を觀、序で大学校寺院の類を一覽し、哲學家Harold Hoffdijnsを訪ふ、夜又「チウオリ」園に入りて、音楽を聴く、○二十九日、Lyngby村に往りCarl Madsonを訪ひ、帰來つてKl. Gemalde galerieを一覽す、○三十日、Den bolan Garten, Serstrads park, das

ethnographische Museum, u. das Museum der nordischen Alterthümerを觀る、薄暮、コペンハーゲン府を出発す、○三十一日、午前十一時頃、ストックホルム府に到着し、Klara Oster Kirka Gataに下宿す、三好退蔵氏亦同居す、夜前「グランドホテル」の夜會に出で、

○九月一日、市街を遊覽し、夜「グランドホテル」の夜會に出で、東洋学会々員に逢ふ、○二日、東洋總會に出で瑞典國王オスカール第二世に謁見す、「○此夜七時よりDrottningholmの王宮に招燕せらる、音楽火戲等盛大を極む、宴會席にて親しく王と談話す、○三日、東亞の部に於て支那哲學家の性善惡論を読む、夜、ランドベルヒ氏に招燕せらる、○四日、午後、Gamla Upsalaに至り、オデアント トール フレー三神の墓上に遊歩し「Hydromel des Dieuxを飲み、それよりウブサラ大学の校堂に入り、宴會に出づ、學生之唱歌極めて佳なり、「此日午前アデルシヨルド氏に招燕せらる、○五日、教授レチオス氏に招燕せらる、○六日、午後七時、ストックホルム市民にHasselbackenに招待せらる、○七日、一時閉會、此時演説ス、オスカル王亦席ニ在り、其文ニ云ク、恭シク瑞典國王陛下ニ申_ス、今_哲回、我日本政府ノ代理トシテ、本會ニ臨ムヤ、實ニ陛下ノ懇勸ナル優待ヲ蒙リ、感謝ニ堪ハザル所ニテ、又陛下ノ學芸ヲ好ミ、殊ニ東洋學ヲ奨励サル、此ノ如ク周到、此ノ如ク懇切ナルニ推服セリ、然レバ今回來臨セラレタル諸君ノ如キハ陛下ノ御意ニ從ヒ、益々東洋學ヲ振起セラルベキハ_哲ノ信ジテ

疑ハザル所ナリ、然ルニ^哲ハ此總會ニ対シ、猶ホ一言要求セント欲スルコトナキニアラズ、是レ他ノ事ニアラズ、即チ歐洲ニ接近セル亜細亞ノ諸語ハ之ヲ講究スル者頗ル多シト雖トモ、和漢ノ言語文章ニ通ズル者ニ至リテハ、実ニ寥寥タリト謂フベシ、然ルニ支那學ニ於テハ猶ホ二三有名ノ學者アリテ來會セラレタリト雖トモ、日本學ニ於テ伯林東洋學校生徒二名ノ歐洲人中ニハ、一人モ臨場セル者ナキガ如シ、抑々我日本ノ如キハ実ニ文學ニ富メル國ニテ、其言語タル他ノ諸語ト言語學上均シク切要ナルコトナレバ諸君カ陛下ノ御意ニ副ヒ、益々東洋學ヲ興起セラル、ニ當リ、日本ノ學ヲモ度外視セズ、他ノ諸語ト同ジク深く推究アランコト希望ニ堪ヘザルナリ、而シテ此事タルヤ必ズ陛下ノ御意ニ戻ラザル所ナルベシ、^哲今回瑞典國ヲ去ルニ當リ、謹テ日本政府ニ代リ、陛下ノ優待ヲ謝シ、併セテ陛下ノ後來日本學ヲ奨励セラレンコトヲ切望ス、」午後、博物館の類を遊覽し、五時より「グランド、ホテル」の夜會に赴く、「此夜十一時頃出發し、那威の都府クリスチアニア府に赴く、○七日、十二時クリスチアニア府ニ到着し、Hotel Scandinavieに投宿」、夜、Frimurloganに招燕せらる、○九日、開會、ウインゲ女史に招燕せらる、午後ビッグドウ島に遊び、Oscar-shallに登る、○十日、午後Hofetosに遊ぶ、○十一日午後二時、閉會式に於て德語を以て演説す、夜市民の爲にFrimurloganに招燕せらる、熊肉を喰ふ、「此夜ゴテンブルグ府に赴く、ウインゲ女史姉妹送りにて停車場に來り、花を贈る、○十二日、朝、ツロルヘツ

タン^トに於て瀑布を見る、極めて壯觀なり、遠近の山水風光亦悪しからず、午後四時半ゴテンブルグ府に着し、加比丹ヤゴブソン氏の家に投ず、夜「グランド、ホテル」の夜會に出づ、○十三日、午後二時、ゴテンブルグ府を出發し、帰路に上る、婦人ヤゴブソン氏送りにて花一朵を贈る、ペーター、ヨンソン氏亦送りに來る、○十四日、マルミヤウ、スツラルズント兩府を経て夜十時頃伯林に着し、直に旧宿に投ず、此行や各國の碩學名儒に逢ふ百有余名、就中哲學家モンラツド氏、梵學家ケルン氏、理學家ノルデンシヨルド氏、梵學家フハスボル氏等の諸氏ハ兼ねて遭遇せんと欲せし所に一時に知己の人となるを得たり、○十六日、東洋學校に出頭し、ランゲ氏に逢ふ、○十八日、Prof. Johneyerを訪ふ、○二十三日、加藤氏來訪、○二十四日、三退好退藏田中稻城并にヤコブソン氏に書状を送る、○二十五日、ヨンソン、ウインゲ二女史に書状并に扇子を郵送す、○二十六日、ドイセン氏を訪ふ、ドルーヴナザール二氏來る、○二十七日、印度人二名と共にドイセン氏を訪ふ、「此日、アデルシヨルド氏に書状送る、○二十八日、レチウス、スツアチンスキー兩氏に書状を送る、○二十九日、印度人杜留華、拿沙爾、支那人張德彝、姚文棟、陶榘林、桂林、潘飛聲、暹羅人一名并に日高真実千賀鶴太郎の十名を招燕す、拿沙爾及び暹羅人故ありて不來、張潘二氏各有序文、○二十九日、ドイゾン氏に招燕せらる、夜、ガレルト氏に逢ふ、○三十日、此年四月七日大和會に當て送れる文は同會より返し來る、「再び印度人を其

客舎に問て談論する所あり。」此日、書状を時事新報に送る。

○十月一日、ラウバフ氏并に三好氏に書状を寄す、且三好氏には旅中立換之分六十七クローネ二十四ユーレ返済す、○二日、Die große Kunstausstellung 并に Unfallversicherung Ausstellung を観る、○三日、此日陰曆に扱れバ、恰も九月九日登高の節に當るを以て陶桂藩之三氏と共に仏羅窪に遊ぶ、

九月九日与陶桂藩諸君俱游仏羅窪、細雨落葉、一村尽帯秋色。余帰思極切、乃賦七絶一首述所懐、

落葉蕭々催旅愁、暮鴉啼冷一村秋、胡天今日帰思切、万里欲回張翰舟、

○五日、三好氏に書状ナザール氏に新聞紙を送る、○七日、トインソン氏を訪ひ、哲学上の事を討論す、○八日、Dr. Müllerを訪ふ、此日、東条氏来訪、旧記を返す、○十一日、金井廷に書状を送る、中島力造来訪、○十四日、レチウス氏に書状を送る、○十七日、金子氏に逢ふ、談論する所あり、○二十一日、東洋学校開講、此学期中新入の学生ハ Reinhold, Jancke, John, Sponheimer, Arndt, Beck, Sheuk の七人なり、○二十二日、Dr. Bopp, Kapitän Jacobs-son 二氏に書状を送る、○二十四日、三好金子二氏と共に日本政治の事を論ず、○二十六日、金子三好二氏と共にギョツンゲン府に至り、法学家イエリング氏を訪ひ、政治上の事を談話し、翌日帰る、○二十九日、東洋学校長に明年夏学期の終に日本に帰ることを報道す、

○十一月十四日、国民之友と云へる雑誌に書を寄す」此日、シム

ル婦人を訪ふ、○十五日、井上円了氏に書状を寄す、○十九日、Gerland, Über das Aussterben der Naturvölker 併に Hertz, Über die Beziehungen zwischen Licht & Elektrizität を読了す、○二十日、ハルトマン 婦人并に教授 ツマイヒヒ氏に書状を寄す、○二十六日、金子氏維納府に赴く、○三十日、和独会の宴を開く、西園寺公望、星亨、諸氏演説し、甚だ愉快なりき、

○十二月二日、Machiavelli, II Principe を読了す、伊勢時雄来訪、○三日、金子、黒田、木内三氏に送る。○五日、外山正一氏に書状を寄す。○六日、和蘭のブリル書肆に東洋学会演説二篇を送る、○二十四日、Egbert Müller, Frau Hartmann 二氏に贈物を寄す、Düring, Dur Werts und Lebens を読了す、夜、三好退藏に招燕せらる、日高、中島、伊勢諸氏亦来会す、○二十五日、Zeller's Grundriss der Geschichte der griechischen Philosophie を読了す、○三十一日、ウインケ、ヨニン、ワンター、セペラー、ミラー、日高、西園寺、ラーガー、スツロイム等の諸氏に年始状を寄す、以上全從明治十七年二月十五日至同廿二年十二月晦日

Darwin, Naturalist's Voyage round the World

Jehring, Zweck im Recht

Rdhot, L'Hérédité

Pausen, System der Ethik

Wundt, System der Philosophie

Harrison, Progress and Order

Schäffle, Über Soziologie
 Häckel, Entwicklung geschichte der Menschheit
 Hellwald, Kulturgeschichte
 *Nordau, Die konventionellen Lügen der Kulturmenscheit
 Ward, Dynamic Sociology
 List, Econmie
 Virchow, Cellularpathologie 4. Aufl. 1872.
 ———, Vorlesungen über Pathologie
 Steintal, Der Ursprung der Sprache, 4, Aufl. 1877.
 Topinard, L'anthropologie,
 Fr. Müller, Allgemein Ethnographie
 ———, Grundriß der sprachwissenschaft
 *Schopenhauer, Die Willen in der Natur
 *———, Optimismus und Pessimismus
 Scherer, Literaturgeschichte
 Landois Physiologie
 Häckel, Generelle Morphologie
 Lyell, Principles of Geology
 ———, Geological evidences of the antiquity of man
 Humboldt, Kosmus, 4 Bde.
 Herschel's Outline of Astoronomy
 Waitz, AllgemeinePedagogik
 Franz Bopp, Vergleichende Grammatik

Hugo Grotius, De jure belli et pacis (1625)
 *Schwegler, Geschichte der Philosophy
 *Lewes, History of Philosophy 2 vols.
 *———, Life of Goethe
 *Buckley, Short History of natural Science
 Lewes, Problem of Life and Mind
 Bain, Mind and Body
 *Lieber, Liberty and Self-Government
 *Mill, on the Liberty
 Tocqueville, Démocratie en Amérique
 Lasson, Rechtsphilosophie
 *Fénelon, Les Aventures de Télémaque, 2 vol.
 Rousseau, Emile
 ———, Confessions
 *Taine, Philosophie de l'Art
 *Ravaisson, Philosophie en Franceau XIX^e Siècle
 Pascal, Lettres provincial
 *———, Pensées sur la Religion
 *Renan, Vie de Jesus
 *———, Dialogue et Fragments Philosophiques
 *Spencer, First Principles
 *Buckle, History of Civilization in England 2 vols.
 *Spencer, Stndy of Sociology

- , Universal Progress
- *Jhering, Der Kampf und Recht (7. Aufl. 1884)
- Chateaubriand, Genie de Christianisme
- Mill, Three Essays on Religion
- Sidgwick, Methode of Ethics
- *Spencer's Principles of Biology 2vols.
- Quartrefages, Unité des hommes
- , Espèce humain
- *Hartmann's Philos. d. Unbewussten 2
- *Kant's Vernunft Kritik
- *Hegels Phenomenologie des Geistes
- Fischer, über Kant 2Bde.
- Logische Untersuchungen, von Trendelenburg 2Bde.
- Lortz, Mikrokosmos 9Bde.
- Fichte, Wissenschaftslehre
- Schelling, Natur philosophie
- *Büchner, Kraft u. Stoff
- Leibniz, Theodicee
- Spinoza, tractatus theologico-politicus
- Locke, Human Understanding
- Hume, Treatise on Human Nature
- Berkeley, Philos. & Philanun.
- *Schopenhauer, Die Welt as Will & Vorstellung
- Wundt, Physiologische Psychologie 2Bde.
- *Darwin, Origin of Species 2vols.
- *——, Descent of man 2 vols.
- Spencer's Principles of Psychologie 2Bde.
- Education
- Herbart, Lehrbuch der Psychologie
- Helmholtz, Erkenntnistheorie
- Schasler, Aesthetik
- Pfleiderer, Religionsphilosophie
- Hegel, Aesthetik
- , Religionsphilosophie
- *Zeller's Grundzuge d. Griech. Philosophie
- Comte, Cours de Philosophie positive
- *Taine, De l'intelligence
- Wundt, Logik
- Hegel, Rechtsphilosophie
- *Kant, kritik d. prakt. Vernunt
- , " " Urtheilskraft
- Dante, la Divina comedia
- *Holy Scripture
- *Alkoran
- *Zend-Avesta
- *Indische philosophie

- *Max Müller, Science of Religion
- , Science of language
- *Rhyss David, on Buddhism
- *M. Williams, Indian Wisdom
- Whewell, History of inductive Sciences
- , History of Discovery
- *Tyndall, Belfast Address
- Lecky, History of Rationalism
- , History of European Morals
- Draker, History of Intel. Development
- Aristoteles, Werke
- Platon's Werke
- *Cicero, De offici
- Bacon, Novum Organon
- *Haeckel, Schopfungsgeschichte
- Descartes, oeuvres complètes, par Cousin
- *Wundt, Ethik
- Barthélemy St.-Hilaire, sur Mohamed
- *Machiavelli, il principe
- Vico, Principles of new Science
- Bruno, Aurora
- *Oldenburg, Buddhismms
- Strauss, Leben Jesu

- *Rousseau, Contrar Social
- *Montesquieu, Esprit des Lois
- Sprenger, Mohamet
- Burnouf, Buddhisme
- Mill, Utilitarianism
- Maine, Ancient law
- Austin, Jurisprudence
- Moleschot, Kreislauf des Lebens
- Vogt, Physiol. Brief

巽軒号不雅請君別賜一号

五羊才子

并ニ耶蘇基督諸哲学派ハ

又耶蘇ハ天神ヲ以テ其德行ノ横範トスレトモ是レ。支那哲学家ガ。天地ヲニ取ルトハ同一視スベカラズ支那哲学家天ハ日月星辰ヨリ禽獸草木ニ至ルマデ一切ノ森羅万象ヲ覆載セル客觀的ノ宇宙ヲ以テ天地トスシ、耶蘇ノ徒ハ。思フヘクシテ視ルベカラザル人性的ノ神ヲ以テアリトシ、之ヲ指シテ天主完全ノ模範ナリト思惜セシコトナレバ兩者ノ間大ニ径庭アルハ識者ヲ俟タズシテ知ルベキナリ、唯々猶太人ガ同一ノ文字ヲ以テ天ト神トヲ述ベ言ヒ頭ハセシコトアルハ稍々相似タリ

(第一冊終)

(ふくい じゅんこ) 立命館大学西園寺公望伝編纂室)